
赤い旗が風に靡き

米問屋のひ孫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い旗が風に靡き

【Nコード】

N4906I

【作者名】

米問屋のひ孫

【あらすじ】

一九八〇年、ソビエト連邦。最高指導者ブレジネフを失脚させてその後釜に座ったアンドロポフはアフガニスタンへの本格的な介入を中止。また、その改革は一応の成功を見る。

そして二〇一七年、米ソ冷戦は相変わらず続き、中ソ対立も続く緊迫した世界情勢の中、十月革命から百周年を迎えたソ連だったが…。

…もしもソ連が改革に成功していたらという、共産趣味者（共産主義者にあらず）の妄想が炸裂した架空戦記。

第一話：ブレジネフの失脚

一九八〇年四月十三日。アフガニスタンの首都カブール北方。バグラム空軍基地。

銀色に鈍く光る数機のTu-95爆撃機がその二重反転プロペラを装備した四基のターボプロップエンジンから一種独特な重々しい爆音を立てながらタキシングをしている。

駐機場ではAn-22輸送機からBMD-1空挺歩兵戦闘車が自走して降りてきていた。

その上空を爆装したMiG-21が五機ほど、編隊を組んで飛び去っていく。

カーピサー州北部のパンジシール渓谷を拠点とするムジャヒディンに対する攻勢を企てているのである。

パンジシール渓谷には「パンジシールの獅子」ことアフマド・シヤー・マスード率いるムジャヒディンが潜んでいたが、ここはカブールとソ連を結ぶ大動脈であるヒンドークシ山脈のサラン峠に近かった。

現に、ソ連軍のトラックが襲撃されて補給物資が奪われるなどの事件が多発していたが、地の利を生かして戦うマスードの部隊に対してソ連軍は有効な反撃ができていなかった。

そこで五千人規模の兵力を投入するパンジシール作戦をソ連軍は立案、まずその準備として空爆を繰り返していた。

ここで少しアフガニスタンの歴史について語らなければならない。アフガニスタンは十九世紀ごろに成立したバラクザイ朝に支配されていたが、王族で首相だったサルダル・ムハンマド・ダーウー

ドがクーデターを起こし大統領に就任。

しかし、彼は改革の過程で支持基盤だったアフガニスタン人民民主党にまで弾圧を加えたため、一九七八年四月、人民民主党系の将校達がアフガニスタン四月革命でダーウードを処刑、ここに社会主義政権が誕生したのであった。

ヌール・ムハンマド・タラキー革命評議会議長を首班とする社会主義政権はイスラム主義者に対する弾圧を開始、これに反発したイスラム教徒達は次々にムジャヒディンとなった。

ここに内戦が勃発したわけだが、社会主義政権内でもタラキーと副首相ハーフィズツラー・アミーンが対立していた。

そして翌年、アミーン派がタラキーを誘拐。結局、彼は「病死」した。

基盤を固めたアミーンだったが、ムジャヒディンと戦うにはソ連軍の援助が必要と判断、介入を要請したのだがそれが彼の命取りとなった。

国内に多数のイスラム教徒の少数民族を抱えるソ連はアフガニスタンの隣国イランで起きたイスラム原理主義に基づくイラン・イスラム革命の波及を恐れていた。

そこで渡りに水とばかりに軍を派遣するのだが、アミーンは無能と判断した。そこで特殊部隊に大統領宮殿で急襲させ殺害してしまったのである。

ソ連はアミーンの後釜にバーブラーク・カルマルを据え、大規模な介入を開始し、一九八〇年一月までに主要都市のほぼ全てをソ連軍が占領した。

後は順調に行くかと思えたが、ここで問題が起きた。

そのムジャヒディンを掃討するには三十万人近くの兵力をアフガニスタンに投入しなければならないとの試算が出たのである。

確かに第一線級兵力だけでも九十万人近く、総兵力は五百万人という世界一の規模を誇っているソ連軍ではあったが、輸送力はさほどのものではなかった。

輸送機やその他もろもろをフル稼働させても三十万人もの兵力は送り込めなかった。

モスクワで党中央委員会書記局の会合が開かれている。

出席者は最高指導者であるレオニード・ブレジネフ書記長、事実上のナンバーツーであるイデオロギー担当書記のユーリイ・アンドロポフ、その部下の農業担当書記ミハイル・ゴルバチョフ、ブレジネフの後継者最有力候補であったがこここのところ失脚気味の中央委員会総務部長コンスタンチン・チエルネンコ、組織担当書記でアンドロポフ派のアンドレイ・キリレンコやドルギフ、ジミヤーニン、カピトノフ、ポノマリヨフ、ルサコフであった。

突然アンドロポフ第二書記が立ち上がった。

しよぼしよぼと目をしばたかせながらブレジネフがそれを見つめる。が、周りの人物は息を潜めた。

アンドロポフはアフガン侵攻決定直後に死去したスースロフの跡を襲ってイデオロギー担当書記となったのだが、前職はKGB（国家保安委員会）議長であった。

例えば、こここのところ巷を騒がせているブレジネフの醜聞だが、それはKGBが撒き散らしたと言うのが衆目の一致する所であった。そして、これまではスースロフがその醜聞を揉み消すために八方手を尽くしていたわけではあるが、今やそのスースロフはいない。

ブレジネフと同じドニエプル系で有力な後継者候補だったチエルネンコもスースロフの死去によるブレジネフの求心力の低下により、徐々にその地盤を突き崩されていた。

四月十七日、ソビエト共産党機関誌「プラウダ」に簡潔な記事が出た。レオニード・ブレジネフは高齢のため引退し、その後継とし

てユーリイ・アンドロポフがソ連最高会議幹部会議長及びソ連共産党中央委員会書記長に就任すると。

西側各国でもある程度は予想されていたため大した騒ぎは起きなかった。

レオニート・ブレジネフは七十四歳で、見た目は単なる権力欲のみの老人であった。一方のアンドロポフは、これまた六十六歳と年寄りではあるがスースロフの葬式では最前列に出てくるなど、後継者候補の筆頭格と見られていたからであった。

第一話：ブレジネフの失脚（後書き）

解説

*Tu-95：ソ連軍およびロシア連邦軍の主力爆撃機。世界最速のプロペラ機としても有名。

*An-22：ソ連軍の主力輸送機。Tu-95と同じく二重反転プロペラを装備。搭乗時は世界最大の輸送機でもあった。

*BMD-1：パラシュート投下可能な歩兵戦闘車。乗員以外に5名の歩兵を輸送できる。武装は73mm砲、AT-3対戦車ミサイル。対空機銃装備型もある。

*MiG-21：言わずと知れたベストセラー戦闘機。レーダーさえ積んでいない簡単な構造のMiG-21Fから、F-15に対抗可能とも言われるMiG-21bisまでバリエーションはさまざま。アフガン侵攻ではMiG-21bisが戦闘爆撃機として多用された。

*レオニード・ブレジネフ：ソ連の最高指導者。史実では1982年11月10日に死去するまで最高指導者の位にあった。ソ連の最盛期を現出したが、崩壊の原因も作つたため評価は分かれる。

*ユーリイ・アンドロポフ：KGBのトップとしてサハロフの流刑などに辣腕を振るつた。が、実際のところは改革派。彼の任期がもう少し長ければソ連は崩壊しなかったともいわれる。

*スースロフ：ミハイル・スースロフ。イデオロギー担当書記。史実ならこの時まだ生きているが、そうなるとアンドロポフを出せない。

くなるので死んでもらった。死んでもらわないと本作が成り立たないという点では重要性は主役級と言えるかもしれない。「赤い枢機卿」の異名を持ち、ブレジネフ・ドクトリンによる諸外国への介入の原因となった、中ソ対立を煽ったのもこの人。

*プラウダ：ソ連共産党の機関誌。プラウダとはロシア語で真実を意味する。もちろんのことながらプロパガンダばかり、おやこんな夜中に誰かが来たようでs パーン！

第二話：残り火

四月、北半球でも中緯度に位置する土地ならばすでに春の兆しが見えているころあいである。

しかし、ここは雪解けと共に雪の下から凍死体がぞろぞろと発掘されるなどと言う、普通の国の住人には考えられない逸話があるソ連である。まだまだ春は遠い。

たとえば、酒場でウォッカを二ボトルほども開け、完全にでき上がった酔っ払いが日本と同じように路上で寝たりすればどうなるか。日本なら警察に連れて行かれるか急性アルコール中毒で病院行きだが、ソ連なら雪に埋もれてまたたく間に凍死である。

そうでなくとも吹雪で見事に視界がホワイトアウトし、酔っ払いでなくても家路を発見できず凍え死んでしまったりもするのだ。

こんなことが首都モスクワでさえも日常茶飯事であった。

モスクワ郊外のあるダーチャ（別荘）の一室では暖炉の火格子の中で火が踊っていた。ガラステーブルの上に並んだたくさんのメダル???それも数個と言う物では無く数十個以上だが。あるいは百個以上か???が暖かな赤い光に照らされ、反射した光が天井に輝点を作る。

メダルの名称は羅列するだけで面倒なほどである。勝利勲章、金星勲章、赤旗勲章二つ、ソ連邦英雄が四つ、レーニン勲章が八つ、外国の物ならば東ドイツのカール・マルクス勲章や北朝鮮の金日成勲章、モンゴルのスフバートル勲章とモンゴル労働英雄、労働英雄は三つもある。ブルガリアなら人民英雄三つ、変わり種ならジョリオ・キュリー記念平和金メダルなど。もちろん他にも沢山ある。

安楽椅子に腰掛けた老人がメダルを一つつまみ上げて手にした布で丁寧に拭き始めた。

古くさいテレビがエフゲニー・ムラヴィンスキーの指揮するレニングラードフィルが演奏するチャイコフスキーの交響曲第五番四楽章を流している。迫力のある、名演と言っても全く過言では無い演奏だが、雑音交じりでひどく聞きづらい。しかし、老人は別にテレビを気にした様子も無くメダルを拭き続ける。音楽は終わり、演奏者の名前やスタッフの名前が流れ去る。その後の一瞬のタイムラゲの後、老人は手を止めていた。

パラボラアンテナがゆっくりと回る映像と形容しがたい音楽と共に、「Время」と言う文字が何度か画面奥からクロースアップされては消える。

そのたびに老人は「ブレーミヤ！」と叫んだ。その声に、扉が少し開き、老婆が顔を出した。

「お父さん、呼びましたか？」

「いや、別に」

テレビの画面ではまたもや「Время」が一文字づつゆっくりあらわれた。

「ブ、レ、ミ、ヤ！」

老人は再び叫んだが今度は誰も扉を開けない。代わりに扉の向こうから女性の声が聞こえてきた。

「パパったらまたテレビの画面読んでる」

「こんにちは。ニュース番組、ブレーミヤの時間です。まず始めのニュースです。親愛なる同志ユーリイ・ウラジミロヴィチの発表によると今年度の農業生産は昨年度の実績を鑑み、昨年比にして百十パーセントを目標とし??」

老人はメダルを拭く手を止めて画面を見た。自分の権力を魔術師のごとく見事に取り上げた男がテレビに映っている。が、憎しみや悔しさと言う物は無い。

ついこの前まではこの手のニュースの始まりは「親愛なる同志レ

オニード・イリイチ」だった。

あまり代わり映えはしないもんだな、ブレジネフはそんなことを考えながらテレビを見つめている。

通り一遍なニュースを読んでから、アフガニスタン情勢についてのニュースが始まった。

「我が軍はアフガニスタン中部のカーピーサー州北部パンジシル渓谷で大攻勢を開始??我が方の損害はごく僅か、敵は手榴弾など武器多数を放棄して敗走中??」

「アメリカ合衆国南部のニューメキシコ州では労働者による資本家に反対するデモが行われ??警察の弾圧により労働者五名が??」

こんなニュースが流れるがブレジネフはもうテレビに意識を向けていなかった。彼は勲章の数々を見て微笑むと次のメダルに手を伸ばした。彫り込まれた大きな赤い星がきらりと光を反射した。

アンドロポフとその部下達は非常に困っていた。

ブレジネフ時代は確かにソ連の全盛期ではあった。弾道ミサイルの数ではアメリカを上回っていたし、制限主権論を旨とする「ブレジネフ・ドクトリン」を振りかざして、「人間の顔をした社会主義」をスローガンに自主路線を進もうとしたチェコスロヴァキアにワルシャワ条約機構軍を派遣して所謂「プラハの春」を圧殺した。

国際的な批判はともかく、国威は大いに発揚したと言ってもあながち間違いと言っわけでは無い。

しかし質、量共に大いに問題がある民生品、主要産業の一つであるにも関わらず自給さえろくに出来ていないほどに生産効率の悪い農業、ハード面はともかくソフト面が壊滅的な重工業という有り様では、国威も何もない。

とりあえず、とるべき道は農業の生産効率の向上による農業偏重の生産体系の転換、民生品に大きく関わる軽工業などの育成、そし

て重工業におけるソフト面の強化であった。

確かに口で言うのは簡単である。生産効率の向上による農業人口を減らし、それを各種工業に振り分ける。ただそれだけのことだが、何にせよ、変化には資金が必要である。それもルクセンブルグのような小国が変化するのとは違い、二億人の人口を持つ、世界の二大大国の片方である。変革には莫大な資金が必要であった。

莫大な資金と言えば、ソ連が開始したアフガニスタン侵攻にも莫大な資金がいる。改革と戦争、二つの事業に莫大な資金が必要だが、両方にそれだけの費用を投下することは出来ない場合、通常は戦争を中止して改革を選ぶだろうと普通は考えられる。しかし、ソ連は様々な意味で普通では無い。

そもそもソ連は大小合わせて百以上の民族からなる多民族国家である。スラヴ民族の一派であるロシア民族を主に、ウクライナ人、ベラルーシ人。少数民族ならフィン人やマジャール人、ヤクート人、漢族、朝鮮族もいる。宗教にしてもキリスト教、仏教、イスラム教から精霊信仰までさまざまである。その中にもいろいろな派閥がある。

そしてそれらの全てがソ連の支配を喜んで受けているわけではない。

もしもソ連軍が理由も無くアフガニスタンから撤退した場合、ソ連の支配を不服としている集団はこれをソ連の弱体化と都合よく解釈して立ち上がる可能性も捨てきれない。

そうなれば、ソ連領内は蜂の巣を突いたような騒ぎになる。そこにアメリカやイギリス、西ドイツなどの西側がちょっかいをかけ、東からはいつものことながら空気を読めない中国が膨大な数に支えられた軍事力を矛にして突き進んでくるかもしれない。

それに軍にもメンツと言う物がある。いったん手を出したにも関わらずすぐに手を引くなどと言うことは彼らのメンツを傷つけ、そして自分の支持基盤にも傷がつくだけであった。例えば、「クレムリンのキングメーカー」ことドミトリー・ウスチノフ国防相あたり

を怒らせるのも考えものだ。得策では無い。

ふとイタリアや日本である地震とか言う災害がソ連でも起きないかとアンドロポフは罰当たりなことを考えた。もしコストロマやイワノヴォと言った大都市が地震で被害を受ければ軍の撤退も正当化されるであろう。

しかし、悲しいかな、ソ連はその国土のほとんどを古期造山帯と安定陸塊、盾状地で形成されていた。地震などよほどのことがない限り起こるはずも無い。唯一あるとすれば環太平洋造山帯の一部であるカムチャツカ半島だけであった。もしカムチャツカ半島が大地震に見舞われたとしても撤退の理由にはならない。

アフガニスタン、カーピーサー州北部パンジール溪谷。

山の中腹にある細い道をBTR-60PA装甲兵員輸送車が数両ゆつくりと進んでいた。やはり屋根にまで所狭しと兵隊がしがみついている。

彼らは陽気だった。

「進め、進め、進め！ 我らの連隊旗は風に靡くー！ 指揮官は先頭に立って進むー！」

屋根に乗っている兵隊も、車両の中の兵隊も大声で歌っていた。

先頭車の上部ハッチから身を乗り出している指揮官のアバザ大尉も歌っていた。

そこに突然の銃声。

「散開しろ！ 散開！」

アバザ大尉が叫ぶがここは細い山道。散開するほどの広さは無い。先頭車の上部ハッチから身を乗り出して叫んだのも悪かった。

火炎瓶が投げつけられ、アバザ大尉は火だるまになり悲鳴を上げながらハッチから飛び出たのたうちまわる。さらに数発の火炎瓶が

先頭と最後尾の車両に投げつけられる。

ハッチからパニックになった兵士がわらわらと飛び出てくることをムジャヒディンのZPU-1対空機銃がうなりをあげた。ムジャヒディンには政府軍から転向したのも多く、そういった者は小さいものはAK-47や手榴弾、大きいものは重火器まで、さまざまなものを手土産にしてムジャヒディンに参加していたのである。

飛び出てきたところに対空機銃弾の嵐。ソ連兵の腕や頭がちぎれ飛んでいく。そしてついに燃えている二つの車両の機関部に装甲を破った弾丸が飛び込んだらしい。ガソリンエンジンで動くBTR-60はいとも簡単に爆発して盛大な炎をあげた。

「糞つたれ！」

そう喚くや否や次席指揮官のグリシャエフ中尉は上部ハッチから身を乗り出して、取り付けられているPK機関銃で対空機銃に取りついていていた敵をなぎ倒す。

「左側のハッチから脱出しろ！」

頭を引っ込めて叫ぶと無線機のマイクを引っつかんだ。

「こちらブーク！ 繰り返す、こちらブーク！ 航空支援を要請する！ 繰り返す！ 航空支援を要請する！」

「リーダー、こちらリーダー、あと三分で到着する、繰り返す、あと三分で到着する」

グリシャエフ中尉の悲痛な叫びにゲルギエフ大尉は答えると機首を南に向けた。後ろから他の二機もついてくる。

三機はMiG-21bis。世界的なベストセラー戦闘機MiG-21の最終型とでもいうべき機体である。MiG-21自体は一九五〇年代半ばに初飛行し、初期型はある意味、エンジンにコックピットと機関砲を搭載して翼を引っ付けたものといしか言い様がないものだった。が、MiG-21bis(bisは改良型を意味する。

言うなればMiG-21改)はRP-22Mレーダーや「ラズール」データリンクシステムを搭載し、適切な味方の支援下になればF-15やF-14とも戦うことができる。ただし、やはり機体のサイズによる制約上、電子機器の性能は一般的な戦闘機のものよりは劣っている。

スピーカーから声が響く。

「オサー、仕事は？」

「オーヴォト、コマール、『パンジシールの獅子』狩りだ」
「了解」

三機のMiG-21bisは爆音を立てながら戦場へと飛んでいった。結構なことに空軍はまだ優雅な戦いを続けていた。

「くそつ！ まだですか？」

誰かが吼えた。連射音が鳴り響いているので聞きづらい。

「あと三分だ！」

そう叫びながらグリシャエフ中尉は銃弾を岩場の陰からのぞいた敵の頭に撃ち込んだ。赤い物がぱつと飛び散り、黄土色の岩場を彩る。

グリシャエフ中尉は足から血を流している。車内から逃げるときに開けっ放しのハッチから弾が飛び込んできたのだった。

しかし、反撃はそこまでだった。車両の陰に隠れて反撃していた彼らの背後から突然銃声が沸き起こったのだ。

夢中になって応戦していた彼らは崖下に据え付けられていた足場に全く気付いていなかった。

全員が崖に背を向けて応戦している隙に背後に陣取ったムジャヒディンはライフルや短機関銃をソ連兵に向けて乱射。瞬く間に辺りは静かになった。

「おーおー、見えてきた、見えてきた」

煙がもうもうと立ち上っているのを見てゲルギエフは呟く。

「リーダー1、こちらリーダー1、ブーク応答せよ、繰り返す、ブーク
応答せよ」

無線機に向けて呼びかけたが、応答は無かった。何度呼びかけても同じことだった。

目標を示されなかった三機のMiG-21bisは帰投せざるを
えなかった。

下にはソ連兵の死体が転がっており、残された武器をムジャヒデ
インは漁っていた。

第二話：残り火（後書き）

解説

* В р е м я : 時間、と言う意味。ニュース番組らしい。正式名称は П р о г р а м м а В р е м я 。カタカナで書けばプログラマ・ブレイミヤかと思われる。なお YouTube で 1977 年の В р е м я を見ることができる。前衛的すぎるオープニングは作者のマイブーム。ついでにスースロフの演説も聞けるが、作者にはロシア語のリスニングなど不可能なのでノーコメント。

* Б Т Р - 6 0 П А : ソ連の装甲兵員輸送車。歩兵十人を輸送可能。ガソリンエンジン搭載のため攻撃されるとよく燃える。Б Т Р - 7 0 も同じ理由でよく燃えたが、Б Т Р - 8 0 からはディーゼルエンジン搭載で燃えにくい。

* З П У - 1 : ソ連製対空機銃（14.5mm）。二連装になるとЗ П У - 2 に、四連装になるとЗ П У - 4 になる。ちなみに巡視船と交戦の末自沈した北朝鮮の工作船にはЗ П У - 2 が積まれていた。

ちよつとした戦闘シーンを入れましたが、突っ込みどころがあれば（と言うよりは必ずありそうですが）ご遠慮なく突っ込みを入れてください。

しかしムジャヒディン、知れば知るほど「中国自重しろよ」と突っ込みを入れたくなるのは私だけではないはず。59式戦車（Т - 54 のコピー）まで供与するとは……アメリカのステインガーなんぞかわいいもんですw

戦車を装備している時点でゲリラではないような感じもしますな。

なお、第一話の題名を変更しました。

第三話：新たな風

第一次パンジシル作戦でパンジシル渓谷を制圧できなかったソ連軍は第二次パンジシル作戦を展開していたが、やはりそこを根城とするアフマド・シャー・マスードを捕らえられていなかった。相変わらず補給路であるサラン峠付近にはマスード軍が出没し、物資の略奪などを行っている。

国威をかけて催したモスクワ夏季オリンピックではソ連は金、銀、銅のメダルを合わせて百九十五個ものメダルを獲得。一方のアメリカや西ドイツと言った強豪は零個と言うすさまじい結果となった。その二国を含む西側諸国の多くが参加していないだけではあるが。

アフガニスタンでのソ連の敵にまた新たな物が加わりそうであった。

アメリカはCIA主導で「オペレーション・サイクロン」を発動、イギリスのM I 6、S A S、パキスタンのI S I、中国人民解放軍などが協力しあいムジャヒディンへの武器供与を開始すべく準備を進めていた。

アメリカからはステインガー携帯対空ミサイル、中国からは迫撃砲やR P G - 7対戦車ミサイルのコピーである六九式対戦車ロケット（R P G - 7の違法コピー）から果ては五九式戦車（T - 54のライセンス生産）が供与されることとなっていた。

他にもアメリカはパキスタンにF - 16を売却することを決定。これはアフガニスタンの空を跳梁跋扈するソ連空軍機をパキスタン空軍に撃破させることが目的であった。

他にも潜入したイギリスやアメリカの専門家がムジャヒディンの幹部に軍事的な教育を行うこととなっている。

はつきり言つて四面楚歌の状況に陥り、首脳部にしてもアフガニスタンから撤退したいという気分に覆われているのだが、超大国という矜持はソ連が諸外国に弱みを見せることを許さない。

とりあえずソ連、アフガニスタンの国境から遠いアフガニスタンとパキスタンの国境線付近などから部隊を撤退させていた。一方のソ連とアフガニスタンの国境には大規模な部隊を集結させている。これで衛星での情報収集能力を持つアメリカにはソ連が戦略的撤退の後に大攻勢に出ると思わせることになるだろう。

モスクワのクレムリン内で行われているアンドロポフとその部下達の私的な会議ではアフガニスタン紛争に関するさまざまな案が飛び交っていた。

部隊の大規模な増派を求めるウスチノフ国防相や継戦を求めるコンスタンティン・チエルネンコと言った異端もいたが、おおかたは撤退に賛成であった。

しかしソ連のメンツを潰さず撤退する方法など撤退賛成派の誰の頭にも浮かばなかった。

KGB出身のアンドロポフは腹心の部下であるヴィクトル・チェブリコフKGB議長に尋ねた。

「同志ヴィクトル・ミハイロヴィチ、どこかで戦争か何かは無いのかね？」

チェブリコフはテーブル上のコップに視線を向け、しばし考え込んでいたがふと顔を上げた。

「同志ユーリイ・ウラジーミロヴィチ、報告によるとイラクがイラン国境に軍を集結させているようです。我々と同じくイラン・イスラム革命の国内への波及を恐れていることのようにありますが、実際に行動に出るかはまだ不明です」

「ほう……親愛なるサッダームを焚きつけてやるのはどうだろうか。

援助するといえはやるかもしれん」

ゴルバチョフがそれを聞いて口を開いた。彼はアンドロポフの書記長就任により、農業担当書記からナンバーツーに当たるイデオロギー担当書記に昇格していた。

「アフガニスタンからイランに戦場を移すおつもりですか？ 同志ユーリイ・ウラジーミロヴィチ」

非難がましい口調であった。アンドロポフはいささかムツとした表情を見せた。

「同志ミハイル・セルゲーヴィチ。諸外国を敵に回してアフガニスタンで戦うのと諸外国とともにイランで戦うのはどちらが得策なのかね？ アメリカにしても彼らが支援していたレザー・シャー・パーレビ（パフレヴィー朝イランの最後の国王。イスラム革命によって亡命、各地を転々とした）を打ち倒したイスラム原理主義勢力を打倒したいと考えるはずだ」

ゴルバチョフは黙った。彼はそんなにうまくいくものかと考えたが、ヴィタリー・フェドルチュク内務相が賛意を示した。

「奴らはユーラシア大陸の要衝、アフガニスタンを我々にとられることを恐れているだけでしょう。イランで戦う分には大して反対はしないでしょう。しかし産油国ですからなあ。オイルイーターなアメリカを刺激しないよう慎重に行動する必要があります。」

フェドルチュク、彼はアンドロポフの後任のKGB議長だったが、アンドロポフの意向により内務相となりKGBのチェブリコフとともにブレジネフの一党であるドニエプル派の粛正に血道を上げていた。もともと粛正といってもスターリン時代のヤゴダやエジヨフ、ベリヤがやったような血なまぐさいものではなく、適当なでっちあげで標的を失脚させ強制的に党の役職を剥奪、年金生活者にしてしまっただけではある。

その点で言えばチエルネンコなどはすぐにでも年金生活に入るに違いなかったが、なかなか尻尾を出さないために粛正しかねていた。

ただし、彼にはすでに発言権はあつて無きものに等しかった。重要な会議では一言、二言発言するだけで、後は押し黙っている。

ちなみにこのソ連を悩ませるイラン・イスラム革命。実は親米的なパフレヴィー朝を打倒すべくソ連が支援を行つて成功させたという説もある。もしこれが本当ならソ連は自分で自分の首を絞めていると言つても過言ではない。

イラク。地中からの恵み、石油を元手にしてこの国は大発展を遂げていた。

と言つても、砂漠のど真ん中に位置する首都バグダットなどもさほど大した都市ではない。発展の内容といえは軍事的な話だった。政治的には世俗的な政策を掲げるサッダーム・フセイン率いるバース党が一党独裁を行つており、バース党の支持勢力がイラク国内では少数派のスニ派イスラム教徒であるにも関わらず、政情は安定している。もちろん国内の多数派であるシーア派イスラム教徒や少数民族のクルド人を圧倒的な武力で押さえつけている結果ではあるのだが。

イランとの国境地帯にある基地にはソ連の売却したT-55やT-72がずらりと並んでいる。

バース党はシーア派イスラム教徒の起こしたイラン革命の波及を恐れているのだが、KGBの能力をしてもこれが本気なのか、それとも脅しなのかさっぱり分からなかった。

軍事顧問かつKGBの少佐でもあるボリス・グネフスキー中佐（KGBとソ連軍での階級は全く別である）はイラク軍大佐に案内されながらこれが本気なのかどうか見極めようとしていた。

確かに補給用の設備は完全に整えられているが、それすなわち開

戦が確実ということにはならない。

隣のアブドゥッラー・ウスマーン・サブ・ハサン・アル・マジード・アッ・テイクリーティーなどと言う極端に長つたらしいフルネームを持つ大佐に水を向けている。彼はここに展開されている部隊の隊長である。

「アブドゥッラー・ウスマーン大佐、これだけ戦車がたくさんあればイラン軍は一撃などと考えてはおらんでしょうな」

グネフスキーは口ひげを少しねじりながら何気ない口調で言ってみた。流暢な英語である。アブドゥッラー・ウスマーンはまじめな顔を崩さず、メモ帳を手にしたままグネフスキーに顔を向けた。

「一撃とは考えておりませんが何か足りないものはありますでしょうか？」

「ふむ、そうだな。戦車というものは空からの攻撃には無力だ。対空車両や携帯対空ミサイルを配備する必要がある」

彼の目の前でアブドゥッラー・ウスマーンは首を少しひねると思いついたように言った。

「そういえばイランにはアメリカのAH-1コブラヘリコプターやF-14戦闘機があるそうですね」

なんだ、F-14などで対地攻撃をまともに行えると思っているのか、この愚かなアラブ人め。

そんなことを心中で考えてグネフスキーは口をゆがめた。

「さよう。AH-1やF-14は危険だ。それ対策にZSU-57-2やZSU-23-4を配備するべきだな」

グネフスキーが教えるとアブドゥッラー・ウスマーンは部下にアラブ語で何事かを囁いた。

ソ連の軍事顧問用の宿舎の中。

殺風景な部屋でグネフスキーが一人でぼつねんとイスに腰掛け、憂愁を帯びた目つきで窓の外を眺めている。

風がきついらしく、砂が舞い上がって黄土色のフィルターとして窓の外の風景の見た目を変えていた。

彼にとってはアブドゥッラー・ウスマーンの囁きは答えであつた。彼にはアラブ語が分かるのである。アブドゥッラー・ウスマーンは知ってはいないが。

第三話：新たなる風（後書き）

解説

*F-16：言わずと知れたアメリカ製の戦闘機。愛称はファイティング・ファルコン。

*F-14：言わずとしれぬ（ry 愛称はトムキャット。なお、一九八〇年当時は地上攻撃能力を持つボムキャットはまだ存在していない。ただし、自由落下爆弾ぐらいは装備できる。

*ZSU-57-2：五十七ミリ機関砲の連装砲塔を装備したソ連製対空車両。地上攻撃などにも転用できるが、肝心の対空攻撃が砲塔の旋回の遅さやレーダーを積んでいないことにより苦手である。

*ZSU-23-4：二十ミリ機関砲の四連装砲塔を装備したソ連製対空車両。愛称はシルカ。軽装甲車両や歩兵相手にも猛威を振るったが、なにぶん装甲が薄いので打たれ弱い。

後書き

今のところは実際の歴史とそう大きく変わっているわけではございません。なお、ソ連の上層部の考えはよく分からないのでその人物の性格やスタンスをもとに意見は創作しております。そんな人はいないと思いますが、ゆめゆめ事実と誤認なされぬようお願い申し上げます。

しかし昨日、よく考えたら十月革命から92周年じゃございませんか。

更新するの忘れてたーorz

第四話：ネップの効能

一九八〇年九月二十二日未明、イラク空軍はイラン領内の十の空軍基地や空港に対しイラン軍機の地上撃破を狙ってMiG-23BN戦闘爆撃機で空爆を行った。また翌日から陸軍がイラン、イラクの国境にあるフゼスターン州に大規模な侵攻を開始した。

右翼に位置する第一軍団はラワンダズ、マリヴァン間を進撃しザグロス山脈の麓にある交通の要衝、デズフルへ、中央の第二軍団は国境の町ボスタンから南東へ進撃しスーサングルドを蹂躪し、幹線道路に沿って交通の要衝であるアフズに向けて進撃していた。

左翼に位置する第三軍団はデズフル以南のアバダン方面を担当し、当面の目標はホラムシャハルおよびアバダンに設定されていた。アバダンは大規模な油田のあるシャトルアラブ川のアバダン島に位置し、イラン経済の要であった。またホラムシャハルはそのアバダンの十キロ北にある戦略上の要衝であった。

しかしイラン軍は意外に早く持ち直し、イランのAH-1による攻撃などで機甲師団は大損害を受け、またイラン軍の人海戦術によりイラク軍の進撃は著しく遅延した。

これが泥沼のイラン・イラク戦争の始まりだった。

ソ連はイラン・イラク戦争勃発の報に接したのではあるが大した動きは見せていない。せいぜいバルト海艦隊、黒海艦隊、北洋艦隊の三艦隊から抽出した艦艇から成る地中海艦隊をペルシャ湾付近に派遣して警戒に当たっているだけである。

アメリカ海軍やイギリス海軍など各国海軍も同様の行動に出ている。しかし海上にまだ戦火は及んでいない。イラン軍は電撃的な侵攻に全く対応できていなかったし、イラク軍は国際世論への影響な

どを慮ってタンカーへの攻撃を差し控えていた。しかし両軍とも、タンカーに対する攻撃能力は十分持っていた。

九月二十四日午後七時、モスクワ

「とりあえず、アメリカの出方を見計らうということ。異存はあるかね？」

アンドロポフがぐるりと一座を見回す。誰も異存は無いらしく動かなかった。

ソ連としてはアフガニスタンからの撤退にこの戦争を利用するつもりであった。そのためには表向き「イランに対する国際的な包囲網を支援するためソ連はアフガニスタンから撤退する」と言う格好だけはつけておかねばならない。しかし、いくらアメリカとイランが敵対しているとはいえ始めから大々的にソ連がイラクを支援してしまうと、ソ連憎しで動いているアメリカが傍観を決め込む可能性が高くなり「国際協調」と言う名目が達成できなくなってしまう。ソ連のとする最善の手は背後からイラン・イラク戦争を焚きつけ、アメリカに介入させるということであった。

一方のアフガニスタンではソ連は意外な発見をしていた。パンジシル渓谷に立て籠もるアフマド・シャー・マスードのことである。もちろんあのKGBが彼の周囲に情報網を張り巡らせないわけが無いのだが、それによるとどうも彼はイスラム原理主義者ではないらしい。彼はただアフガニスタンから「異民族」であるソ連を追いつ出しただけの愛国者であり、その背景に反共産主義だの、イスラム原理主義といった思想は存在していないようであった。その上イスラム原理主義者を嫌っている節さえあった。

ソ連にとっては誠に好都合といえた。ソ連はイスラム原理主義の国内への波及を避けたいだけである。ならば不人気な現政権のバーブラーク・カールマルを切って「パンジシルの獅子」などと崇められ始めている彼をアフガニスタンのトップにすればよいだけであ

った。

仮にソ連がここで撤退すれば今の政権などすぐに崩壊し、地方の軍閥が群雄割拠することになる。しかしすべての軍閥は弱体といっても差し支えはない。ただマスードの率いる軍閥はマスードの力リスマ性をもつて、数多の軍閥に比べれば頭一つ抜け出することは間違いない。

マスードがアフガニスタンを統一すればイスラム革命に対する防波堤となり、ソ連のカールマルに期待していた役目をそっくりそのまま果たしてくれるのであった。

とりあえずソ連首脳陣はイラン・イラク戦争を煽ってアメリカに介入させ、好機を見つけ次第アフガニスタンから撤退と言うことに決めたのであった。

しかし彼らを待ちかまえる問題はそれだけでは無かった。

ソ連の経済状況である。労働者の勤労意欲の低下が祟って、あらゆる物品が足りなくなっているのであった。

勤労意欲の低下についてはさまざまな原因があった。

最大の理由としては「全人民が平等」という建前を持つ、社会主義特有の働いているものも働いていないものも全員待遇が同じになつてしまうという現象があった。他にも社会全体で汚職が蔓延していることや、硬直した官僚主義や、過度に保護された企業の怠慢というものもあった。

それを打破するためにはさまざまな方法が提案されていた。

ゴルバチョフなどの推す市場経済の導入や、それに対してKGBや内務省系のフェドルチュクやチェブリコフなどの主唱する「アメとムチ」的な政策があった。

アンドロポフとしては社会主義の計画経済の限界は感じており、市場経済の導入も検討に入れていないのでは無かったが、党組織からの反発が大きいことは容易に予想され躊躇わざるを得なかった。

また、社会主義経済をいったん破壊し同時に市場経済の仕組みを構築することとなるわけだが、破壊したは良いが官僚や国营企業などの抵抗で市場経済が構築できなかったとすれば目も当てられない。

経済が無茶苦茶になった国など崩壊する他無いのである。

一方の「アメとムチ」的な政策の方も有効といえは有効であり、一部はすでに導入されていたがあまり人気ではなかった。

例えば働きにに応じてウオツカの配給券の枚数を調節する政策を始めたのだが、上の連中がピンハネして券が肝心の労働者に行き渡らなかったり、もらえなかった奴が工業用アルコールや塗料の薄め液などをウオツカがわりに飲んだ揚げ句に病院に担ぎ込まれたりするという事例が多発していた。要するに綱紀粛正ができていないため全く逆効果になっていたのだ。しかし綱紀粛正と言っても、フェドルチュク内務相はかのNKVD以来のチエキストとして知られており、大粛正の恐怖を再び呼び戻さないと限らなかった。確かに大粛正の時代は皆が粛正の恐怖から逃れようと熱心に働いたが、そんなメリットより有能な人材が次々に無実の罪で粛正されていくデメリットの方が大きかったのである。

もちろんゴルバチョフにしてもKGBおよび内務省系を敵に回すのはまずいと分かっていた。しかし部分的資本主義の導入程度の話ならば彼らを容易に説得できるのである。

根拠はレーニン。

彼はロシア革命後の疲弊したソ連において、ネップ??新経済政策、Новая экономическая политикаのアクロニム??を採用。つまり余剰農産物徴発制を廃して収穫の一角を食料税として納付し、残りの農産物を市場で自由に取引することを許可し、また中小の商店や企業は個人が経営することを許した。そのため労働者の意欲が上がり、工業および農業生産は第一次大戦前の水準にまで持ち直した。

明らかに社会主義とは異質ではあるが、彼は「管制高地??つま

り発電所に類するインフラ設備や重要産物の生産手段など??を国家が掌握しているため完全な資本主義にはならない」「社会主義の優位性から見ていずれ資本主義的な制度が消滅して行くのは必定」と述べて正当化??正当化と言うと語弊がある。ソ連初期の政策の中ではこのネツプが一番まとも??していた。

トロツキーは反対したが、彼と志を同じくする世界革命論の信望者の一部にも「世界革命が達成されるまではロシア一国のみで社会主義を維持することは困難」との立場から賛同者が出た。

しかしレーニンの死去、トロツキーらの推す世界革命論の敗退およびスターリンの一国社会主義??ロシアの国土の広さと資源の豊富さによりロシア一国のみで社会主義を維持することは可能であるとの理論??の勝利により否定され、第一次五カ年計画でネツプは消滅し、農業集団化などで大規模な飢饉が発生することとなる。

ゴルバチョフ一派は内務省系統の相手に対しレーニン式のネツプと綱紀粛正策の併用を持ちかけその有用性を説いた結果、案外一も二もなく賛同を得られたため即座に実行に移された。それは結構な効果を上げたためソ連は一息つけることとなるのだったが、いつのまにやら社会主義から半社会主義、半資本主義へと国の思想が移ってゆくことになるのだった。

後はソ連首脳部の思うように事は運んで行った。

激化したイラン・イラク戦争にアメリカは西側諸国を誘ってイラクに対する支援を開始したのである。頃合いを見計らってソ連もイラクの支援を発表、イラク支援に注力すると称してアフガニスタンから撤退。

この際、マスードがソ連軍の撤退に全面的に協力したため、見返りとしてソ連は与えても差し支えない旧式兵器を彼の軍閥に大量に供与した。

結局彼はアフガニスタンを手中に収めることに成功しアフガニス

タンの安定に貢献、安定を見届けると後を部下に任せて建築学の勉強を始めたそうである。

一方のイラン・イラク戦争は激しくなり続け、石油をめぐるソ連とアメリカのイラクに対する援助合戦により最新兵器の試験場とでも言つべき有り様となった。一方のイランは中東におけるイラクの強大化を恐れるイスラエルとソ連と敵対している中国の援助を受け頑強に抵抗。イラン、イラク双方とも国力を使い果たす寸前にまで追い込まれ結局開戦前とほとんど同じ国境線で、一九九〇年四月に停戦となった。

なお、その間一九八四年二月九日にアンドロポフが持病の糖尿病による腎機能の定価などで死去、後任にはゴルバチョフが入った。彼はチェブリコフやフェドルチュクと言った内務省系に官僚の綱紀粛正を一任、それは成功だったらしく官僚の汚職は劇的に減少した。しかし、幹部級の官僚の多くが突然蒸発したり、戸籍から消滅するといった事態が起きたのも事実であった。

ただしソ連はネツプと綱紀粛正の併用で持ち直したのは確かであり食料自給率は年々上昇し一九九五年にほぼ百パーセントを達成、また不必要なほど巨大化していた官僚機構の縮小により横方向の意思伝達がスムーズとなったため技術開発なども容易になった。

少なくともソ連の再建は成功したと言っても差し支えはないのであろう。

第四話：ネツプの効能（後書き）

ご都合主義じゃねえかとツッコまれそうなところについての解説w
*マスード：ソ連がアフガニスタンからの撤退を発表すると捕虜を自発的に解放、また撤退の手助けをした。これによってソ連からの印象を良くした彼はタリバンと対決する際にソ連およびロシアからの援助を得ることができた。北部同盟に属してタリバンと戦っていた彼だが同時多発テロの二日前にカメラマンに化けたテロリストに爆殺される。なお、この世界ではアフガン侵攻が一瞬で終わってしまったためイスラム戦士を統一したという意味でのタリバンの下地はできなかった。そのためマスードに各個撃破されたという設定。

*イラン・イラク戦争：史実では1988年8月20日に停戦。イランとイスラエルが組んだり、アメリカとソ連が同じ国を支援するなどよくわからない事態となった戦争でもある。イスラエルのイラク原子炉爆撃事件、アメリカ軍のフリゲート艦スタークにイラク軍のミラーージュF1がエグゾセを誤射して大破させる、イラク軍が反乱を起こしたクルド人に毒ガス攻撃を行ったハラブジャ事件、巡洋艦ヴィンセンスによるイラン航空655便撃墜事件など悲惨きわまりない出来事が目白押し。戦場でも地雷原を歩兵の大群で突破しようとするイラン軍に対してイラク軍がびらん性イペリットで攻撃するなど凄惨極まりないものとなった。また、債務の返済に苦しんだイラクが大パトロンだったクウェートに進撃（債務をまけてくれるよう交渉したらクウェートの担当者がフセインのことを「淫売の小倅」などと罵ったのが原因ともいわれるが真偽は不明である）、湾岸戦争やイラク戦争の原因にもなった。

なおこの世界ではイラクにはクウェートに喧嘩をふっかける余力は無く、原油の高騰にあきあきした、中東の安定化を望む諸国が継続的に経済援助などを行っているため湾岸戦争も起きずフセイン大統領

領は無事である。

* 不必要なほど巨大化していた官僚機構：以下にソ連のバラエティに富んだ省庁を一部紹介。

造船省：船の建造

航空工業省：軍用機全般

機械制作省：砲弾や弾薬

中型機械製作省：核関連。核弾頭や原子炉など

一般機械製作省：弾道ミサイル全般

などなど。他にもたくさん。基礎分野の研究が非常に優れていたソ連ではあるが、凄まじい縦割り行政だったためにほとんど研究成果を共有できていなかった。旧日本軍もびっくり（ドイツからジェットエンジンの技術を陸軍と海軍が別々に買おうとした話などソ連に比べればマシ）の縄張り争い状態だと考えてもらえればよい。

一応次回から二〇一七年へ。

第五話：セミヨーン・ロマノヴィチの一日

二〇一七年三月十日午前七時、モスクワ市内のマンションにある一室。

質素な部屋ながら大きな壁掛けテレビが部屋の壁に掛けられ、机の上には携帯電話が置かれている。住民の暮らしぶりはいらしい。戸棚の上になににこと笑った四人家族の写った写真が飾られている。窓の外には摩天楼が建ち並び、その合間合間からクレムリンの尖塔や葱坊主型のドームがのぞいている。雪がしんと降り積もり、雲の切れ目から差し込んだ弱々しい日光が雪に反射されていた。

テレビの横の壁にやはり掛けられている電話がけたたましい電子音を鳴り響かせ、この部屋の主であるセミヨーン・ロマノヴィチ・メルクーロフは目を覚ました。彼は大きく伸びをしてから、きびきびとした動作でベッドから降りた。途端に電話は鳴り止んだ。

彼は顔を洗ってから、冷凍庫からピロシキを出してオープンに放り込んだ。そしてテレビをつけ居間の真ん中に立った。四、五十秒も立った頃だろうか、軽快な音楽と共に画面にジャージ姿の女性が現れる。

タヴァーリッシ

「おはようございます、同志！ 今日皆さん、私と一緒に朝の体操をしましょう！ さんはい！」

ジャージの女性の動きにあわせて体を曲げたりひねったりと言った体操をしてから台所へ向かう。ピロシキはちょうどよい温まり具合だった。

彼はパリッと糊の利いたスーツを着て上から裾が脛にまで届きそうな、灰色のトレンチコートを着て家を出た。耳当てのついた例の帽子、ウシャンカも忘れない。マンションの通路の奥にあるエレベ

ータのボタンを押して待つっていると後ろから声をかけられた。

「おはよう、調子はどうだい？ セミヨン・ロマノヴィチ」

隣の家に住むオレーグ・ミハイロヴィチ・グルシコであった。立派な口ひげを蓄えた男で、文化省に勤務しており、報道関係の仕事にかかわっているらしいがメルクーロフも細かいことは知らない。

「おはよう、オレーグ・ミハイロヴィチ。こっちはぼちぼちな。

そっちはえらく機嫌が良さそうじゃないか」

「分かるか？ いやあ、新車のVAZ-6101が今日届くんではないか」

「ロータリーエンジンでハイパワーとかって流行ってるあれか、納車は一年待ちとかじゃなかったか？」

「息子が売り出す前から雑誌で見つけて、買え、買えってうるさくてなあ。即予約だったよ、ははは」

つまらないことを言い合いながらマンションの玄関から出ると寒風が吹き抜けて行った。

歩道や車道はヒーターが埋め込まれているが道端には溶けていない雪が積もっていた。

二人は世間話をしながらだらりと歩いていく。グルシコはともかく、メルクーロフは車を持っているのだが、職場に駐車場がないので地下鉄通勤である。

モスクワの地下鉄は最近観光名所になっている。社会主義リアリズム様式の極めて豪華な装飾が施された駅構内はさながら宮殿のようであり、西側からの観光客にも人気が高い。何でもツアーを組んでモスクワの地下鉄の駅巡りをする観光客もいるらしい。

メルクーロフの目的地は国防省のオフィスの最寄り駅であるモスクワ地下鉄環状線のパールク・クリトウリ駅。正式名称はパールク・クリトウリ・イーメニ・ゴリコヴォ駅、つまりゴリーキー記念文化公園駅、という意味だが、その名前で呼ぶ者はほとんどいない。

白い大理石の円天井やシャンデリア、青少年がスポーツなどに励むレリーフが飾られている駅である。

彼は玄関ホールから出ると前かがみになり、ポケットに手をつ込みながら風に逆らって進んでいった。

メルクローフは自分のデスクに座って顔をしかめていた。本来彼は偵察衛星などの管理をしている衛星管理局の局長なのだが、このごろその仕事より優先させるべき仕事が多い。

「建国百周年記念式典における市民による自主デモ行進の運営に関する諸問題」のような本来は管轄外の仕事に関する書類の中に時々「二月九日十時三十七分にレゲンダシステムに起きた不調についての報告」などと言った本当に重要な書類が混じっているのである。そのためGRU（参謀本部情報総局）や衛星管理局の制服組などから「仕事が遅くなった」などと叱責を食らっているのである。洗面を作るなどというほうが無理な話ではあった。

蛍光灯の無機質な明かりのもとミスのある報告書には赤線を入れて突き返し、無い報告書には優雅な続け字でサインを入れていく。窓の外ではまだ雪が降っていた。

午後三時。

遅い昼食を一階の食堂でとっていたメルクローフの目の前を中学生ぐらいの集団が先生らしき長身の女性に先導されて歌いながら行進していく。ガラス越しに白く雪に閉ざされたモスクワの町並みを先頭に立つ級長らしき学生が高々と掲げる赤い旗が進んでいくのが見える。

「???プロレタリアの旗のため、プロレタリアの旗のため！ 重き鎖を響かせ、同志は去り行きぬ??」

メルクローフは片手にティーカップを持ち、雑誌を読んでいたが、

視線をあげて暗い歌を歌いながら進んでいく中学生の背中を追った。
「『同志は斃れぬ』か、行進には向かんと思うがなあ。葬列じゃないんだから。まったく景気の悪い。『我ら赤軍騎兵隊』でも歌つきやあいんだ。ちやかぼこした中学生にはおあつらえだろう」

ミルクテイーをすすつてからサンドイツチを口に放り込んだ。「自主デモ行進」の用意に手を割かれているせいか口調は刺々しい。

「よお、セミヨーン・ロマノヴィチ。隣の席空いてるか？」

陽気な声に彼は振り返った。

「ああ、エフゲニー・マクシミリアーノヴィチ。どうぞどうぞ」

キャベツのシチーと黒パンを載せたトレーを持ったエフゲニー・マクシミリアーノヴィチ・ニシンスキーが隣に座る。彼はメルクーロフと同期で結構仲も良い。

「いやー、今度の式典すごいぞ、お前は嫌だつて言うのかも知れんけどなあ」

「嫌ではないが俺のところはまだ仕事を押し付けるのはやめてくれ、肩をすくめてお手上げ、というポーズをメルクーロフがとる。」

「それでもだな、ハルハ川事件（ノモンハン事件）やスペイン内戦、大祖国戦争（第二次大戦における独ソ戦のソ連側呼称）で活躍した戦闘機とかを全て復刻するんだからな。お前、Y a k - 9とかL a G G - 3とかだけじゃないぞ。あの珍品の重爆撃機P e - 8やY e r - 2も復刻してモスクワ上空を飛ばすことになってる」

「何だそれ？」

「P e - 8つて言えばモロトフ外相をニューヨークに連れて行った四発重爆じゃねえか。Y e r - 2は一九四一年にタリン（エストニアの都市）からベルリンを爆撃した双発爆撃機で??」

「あー、分かった分かった。そのー、なんだ、変な爆撃機を復刻するんだろ」

「しかしだ、誠に遺憾ながらP - 39エアラコブラとかは復刻しないんだ。アメリカ製だからだつてさ」

「んああ、そりやそうだろうな」

メルクーロフは相づちを打った。

アメリカからのレンドリースの中に入っていたP-39は本国での評判の悪さとは裏腹にソ連では評判の良い戦闘機であった。それは別にソ連にまともな戦闘機が作れなかったのでは無く、天候などの理由で空中戦はP-39の得意とする低高度空域で多発していたこと、ソ連が翼内機銃などを取り外して機動性を向上させていたことによる。ちなみにソ連軍は機首に武装を集中させて機動力を確保するという目的や、木製の主翼の桁の強度などの問題から、二十ミリ機関砲一門、十二・七ミリ機銃二門を機首に配置したLaGG-3などの代表例を手始めに、La-7戦闘機に至っては二十ミリ機関砲三門を機首に集中装備していた。

メルクーロフはP-39の素晴らしさについて熱く語るニシンスキーの言葉に適当に相づちを打って食事を終えた。まだまだ仕事がある。

午前六時。

モスクワ市内の酒場メルクーロフは一人酒を楽しんでいた。いつもは家に直行だが、家族がロストフ・ヴェリーキイに住んでいる親戚の家に遊びに行っているため直行する理由が無い。

天井からつり下げられているテレビにはソ連軍の演習の風景が映し出され、アナウンサーが勇ましい声で解説を行っている。至って平凡な兵器しか登場していないが、彼は仕事柄、ソ連軍がもう少し進んだ兵器を保有しており、百周年記念式典で大々的に披露目することを知っている。

なんとも平凡な一日は日暮れを迎えていたのだった。

第五話：セミヨーン・ロマノヴィチの一日（後書き）

小学生高学年のころ『収容所群島』で知られるソルジェニーツィンの作品で、やはりラーゲリ内部を描いた名作『イワン・デニーソヴィチの一日』を読んで、何を思ったか父に「ラーゲリって面白そう」「ラーゲリに行ったら煉瓦積みしたい」などと言って面食らわせたことがあります。

ちなみに満州で軍医をしていた我が曾祖父はラーゲリに入って帰ってきませんでした。我が一族の黒歴史な人物だったらしく、祖父いわく「シベリア抑留は極悪非道だが、うちの親父のみに関してはスターリンに感謝してる」とのこと。なんかよほどの人物だったらしいですが、写真を見ると私そっくりで凹みます。

次話からちよつとずつソ連の最新兵器が出てきますが、ストラママガいのとんでもない物は出てこないの、そっちの方面を期待している人には申し訳ない次第。

せいぜいYak-201とか、MiG-44のステルス化機体、企画倒れになった発展型ウダロイ級駆逐艦のオブジェクト11560、完成できなかった空母ウリヤノフスクやその改良型が登場する程度で。

そついやソ連が崩壊しない限りF-35Bは技術的には全く違った存在になるわけですが、アメリカ軍の兵器はどうしようと思案中。

第六話：Overture / 1

いわゆる「冷戦構造」が続いていたがなかなかそれも流動的な物だった。ソ連を盟主とするWTO（ワルシャワ条約機構）にはソ連、ブルガリア、ルーマニア、東ドイツ、ハンガリー、チェコスロヴァキア、ポーランド、キューバが加盟し、アメリカを盟主とするNATO（北大西洋条約機構）にはアイルランド、スイスを除く西欧諸国、北欧のノルウェーとギリシャ、トルコが加盟している。その上、「北大西洋」と銘打っている割には日本、韓国も加盟していた。その二つの勢力の緩衝国としてスウェーデン、オーストリア、スイスが存在している。フィンランドは中立国にも関わらず西欧には親ソと見なされて冷遇され、ギリシャはNATOに加盟しているにも関わらず親ソ派政権が誕生していた。

一方のWTO内でもルーマニアは好き勝手にやっているし、ハンガリーも似たような物である。他にも伝統的にロシアが大嫌いなポーランド（自業自得な面もあるのだが）はことあるごとにソ連に楯突く。チェコスロヴァキアもしょっちゅう騒ぎを起こす。明らかに統制が取れていない。

第三極としては中国、インド、パキスタン、ユーゴスラビア、イラクなどが存在しているが、およそ「第三極」などと一纏めに出来るような物では無く、親ソ派のインド、イラク、エジプト、シリアや、共産主義国家ながらアメリカとも手を組んでいる中国、中国との関係は良好だがアメリカとは仲の悪いパキスタンとイラン。中ソと等距離外交を展開している北朝鮮。そして自主独立路線を採るユーゴスラビアや鎖国状態のアルバニアなどとややこしいこと極まらない。

特にアルバニアの鎖国は年々徹底して来ており、国全体がブラックボックス状態である。近隣諸国からすれば脅威というわけではないが、気味が悪いのは確かである。

アフリカでは資源争奪戦から発展した強国による新植民地主義が跳梁跋扈しており局地紛争が絶えない。

最大の戦場はコンゴ（旧ザイール）で、モブツ大統領の亡命後は南部は東側諸国が後押しする『カタンガ社会主義共和国』、西側諸国及びその勢力下のコンゴ共和国の援助を受ける北西部の『コンゴ民主国』、中国の後押しするコンゴ北東部を実効支配している『コンゴ人民解放戦線』が三つ巴の戦いを繰り広げていた。

要するに各々の傀儡政権に軍需品を供給し戦わせ、豊富なコバルト、ラジウム、ウランと言ったレアメタルや金、ダイヤモンドをその対価として遠慮なく採掘していくのであった。

カタンガ社会主義共和国の位置するカタンガ州はコンゴの中でも最も地下資源の豊富な地域の一つで、主に銅、スズ、ダイヤモンド、コバルト、ラジウム、ウラン、ダイヤモンドを主に採掘している。

特に重要なのは銅で、カッパーベルトとして知られる世界的な大産地に位置している。その点ソ連は上手に立ち回っており、カタンガ、ザンビアを自陣営に組み込むことでカッパーベルト全体への支配権を確立していた。

なお、世界の銅産出量の四割ほどをカッパーベルトが占めている上にソ連のジェズカズガン、ポーランドのルドナと言った世界有数の銅山が東側諸国にあった。また友好国であるアフガニスタンにも世界的に見ても巨大な銅山であるアイナクがあり、この開発をソ連が一手に引き受けていることも銅ビジネスにおいて東側諸国が有利に動ける理由でもあった。

一方西側はチリのチュキカマタやアメリカのモレンシーと言った銅山に頼っていたがなにぶん古い銅山のため埋蔵量がだいぶ減ってきていた。そこで新規に発見されたチリのラエスコンディータ、コジャワシヤペルーのアンタミナが主力銅山となっていたが、チリやペルーは来る物は拒まずと言った態度で西側だろうが東側だろうが

第三極だろうが、多くの金を払った方に採掘権を与えていた。

カタンガ社会主義共和国の首都ルブンバシ。

ソ連の駐カタンガ大使アンドレイ・ワシリエヴィチ・ウルリヒは
はげ上がった額の汗をハンカチで拭った。ソ連大使館の一室で雲の
切れ目からカツと照りつける日差しが窓に差し彼の髪が薄くなった
頭を照らす。

彼は大使兼軍事顧問と言うややこしい立場にあつた。「義勇軍」
と言う名の駐留ソ連軍とカタンガ軍の合同作戦ともなると駐留ソ連
軍司令官のワシリー・ヤヌアリエヴィチ・ヴィシンスキー少将と協
議の上で決めた作戦計画をカタンガ軍のムゲマ・エンバ大統領兼総
司令官に伝えなければならぬ。

しかし現在は前線は小康状態でさしたる仕事は無い。彼はハンカ
チをワイシャツの胸ポケットにねじ込むとため息をつき単調なクー
ラーの動作音を聞きながら新聞を読んでいた。

そのよんだ空気を電話の呼び出し音が引き裂いた。

「ウルリヒ大使、ヴィシンスキー司令官からお電話です」
受話器を取ると秘書の声がした。

「よし、切り替える」

少しだけ憂鬱そうな感情のこもった声で答えると、受話器を耳に押
し当てる。

「もしもし、同志アンドレイ・ワシリエヴィチか、いい加減に海岸
線を確認しろと海さんのマレノフ中将がうるさいんだが、どうした
もんかね？」

「アンゴラじゃ駄目だったか？」

「停泊料金がばかに高いらしいな。ふっかけられてるとか。なもん
で後方の補助艦艇群はリユーデリッツに停泊しているらしいが」

「そんなこと言ってもこっちのビッグ・ダディだってがめついぞ」
はあ、とため息をつきながら彼は地図をなぞった。

ちなみに「ビッグ・ダディ」とはムゲマ・エンバの愛称のようなものである。テレビではエンバご本人が登場して人民のために汚職官僚や「人民の敵」を恫喝し処罰する「ビッグ・ダディーズ・シヨ」が人気を博している。カリスマ的ではあったが、普通の独裁者と大した違いは無い人物である。

「陸軍が血を流して得た港でビッグ・ダディがソビエト海軍にふっかける、か」

ヴィンスキーの言葉にウルリヒはにやにやと笑う。

「どちらにせよチカパは奪取したからな。キクワイトまで四百キロも無いぞ。アンゴラ領内からも攻勢をかければ一瞬でキクワイトとキンシャサが落とせる。コンゴ共和国にまでアメリカの連中を追い落とすのは簡単だ」

ウルリヒが地図をなぞりながら話すとヴィンスキーが受話器の向こうでくつくと笑った。

「なるほど。そのように本国と連絡を付けよう」

「いや、待て、同志ワシリー・ヤヌアリエヴィチ。革命百周年記念式典が終わるまでは国際社会の批判は避けなければ、と言うのが本国の意向だろう」

カタンガ社会主義共和国とコンゴ民主国の見渡す限りの濃緑色に彩られた国境線上をソ連海軍航空隊所属の戦術偵察機 Yak - 203 R が遠雷の如き音を響かせて比較的低空を飛んでいた。濃密な森林の隙間から茶色い泥水の流れている川が時折顔を覗かせる。

Yak - 203 R はヤコブレフ設計局が「軽量前線戦闘機計画」に基づいて開発した VTOL 戦闘機 Yak - 141 の改良型である。Yak - 203 の写真偵察型である。基本的には最新鋭機であるこ

の機体は輸出されず、強奪の危険性があるアフリカの航空基地には配備されていない。ならばなぜアフリカにそんなトップシークレッツの機体が舞っているかと言えば、ソ連海軍はアメリカ海軍に対抗すべく艦隊の拡張に努めており、ニミッツ級原子力空母に匹敵するオクチャーブリスカヤ・レヴォリューツィヤ級原子力空母を五隻、それより少し小型のウリヤノフスク級原子力空母を三隻と巡洋戦艦にカテゴリーされることもあるキーロフ級原子力ミサイル巡洋艦七隻、シチエルバコフ級原子力ミサイル巡洋艦四隻を基幹とする外洋艦隊を整備していたからである。要するにYak-203シリーズは艦載機である。

しかしアメリカ海軍もニミッツ級原子力空母十隻に加えてジェラルド・R・フォード級原子力空母を四隻配備するなど海軍力におけるソ連に対する優位を維持しようと努力を続けている。また長距離対艦ミサイル多数を備え「空母殺し」などの異名を奉られたソ連の誇る巡洋艦群に対抗すべくルイジアナ級原子力巡洋艦を続々とその船台から海に送り出していた。

Yak-203Rのパイロットは後部座席のオペレーターとつまらない雑談をしながらいつも同じルートを飛んでいた。

「じゃあウオッカ一本確保しといてな」

「銘柄は？」

「えーとな、『モスコミュール』か『ソビエツキー・ソユーズ』で頼みますわ」

「よろし！ん？おっと、十時の方向から未確認機が接近中だそうだ。どうせいつつももの奴らだろうが、気を付けてくれよ」

「りょーかい」

気だるい調子で答えるとヘルメットにAWACSから送られてきたレーダーの画面が映し出される。彼はそれがいつもと同じだと言うことをすぐに見て取ると後部席にいるオペレーターに片手で丸を作って見せた。

しばらくすると前方から猛然と飛んできた航空機がある。行き違
うとすぐ後ろで急旋回して横並びになった。

彼は横を飛ぶ機体を一瞥するとオペレーターに「いつものトム
キャット11さんだ」と告げる。

トムキャット11はアメリカ海軍の配備したステルス戦闘機で正
式名称はF/A-22N。売り文句は「艦載型F-22」とのこと
だがF-14の如き可変翼などのギミックを採用した結果、「F-
22風のF-14トムキャット」と言すべき機体となっている戦闘
機である。おかげで一般人からの愛称の公募では「トムキャット」
「トムキャット11」が殺到、だが当時はF-14が現役だったた
めそんなややこしい真似は出来ない。そこで「ボブキャット」と決
められていた。ただ、正式な場以外では皆「トムキャット」系の名
前で呼び、「ボブキャット」と呼ぶ者は少ない。

このように人気者かつ、パイロット達からも現役戦闘機の中では
一番人気を誇る本機はステルス艦上戦闘機とのことだがそのわりに
レーダーにも良く映る。

アメリカのパイロットが風防越しに「Good? job!」とで
も言うかのように親指を上げていた。彼も挨拶を返したが、折り返
し地点に来たので手を振ってから旋回すると母艦に機首を向けた。
「あのトムキャット11って、ばっちりレーダーに映ってるけどど
うすのかねえ。このサイズじゃ鳥とも見間違えられんよなあ」
オペレーターは笑いながら言った。

「ソ連製レーダーはボロいから映らねえなんて思ってたすりゃ
ねえの。この前やってたハリウッド映画じゃロシア人が壊れた機械
をばかばか殴りつけとった。直すためにな」

「そりゃひどいな。いつの話なんだよ」

二人はげらげら笑いながら母艦に帰って行く。まだコンゴ上空は呑
気であった。

第六話：Overture / 1（後書き）

登場する兵器の解説

* Yak - 201（Yak - 203）

乗員：1名

全長：17.2 m

翼幅：9.8 m

空虚重量：11,200 kg

最大速度：M1.8

航続距離：3,200 km

武装

GSh - 30 - 1 30 mm機関砲（弾数150発）

ウエポンベイ + ハードポイント × 4 最大搭載重量4

5 t

派生型

Yak - 201：主生産型

Yak - 201UB：複座練習機

Yak - 201K：艦載型

Yak - 203（Yak - 201M）：エンジンをリユーリカ

設計局製AL - 41Fに換装し、三次元水力偏向装置などを搭載、機動性が大幅に上がっている。兵装類最大搭載量も5 tに向上した。今後の主生産型。

Yak - 203K：Yak - 203の艦載型

Yak - 203KR：戦術偵察機で複座型。艦載可能

運用

ソビエト連邦空軍

ソビエト連邦防空軍

ソビエト連邦海軍

ヤコブレフ設計局が「軽量前線戦闘機計画」に基づいて開発した Yak - 141 戦闘機の改良型。VTOL 可能でステルス性を備えている。優秀な戦闘機だが武装が少々貧弱。

エンジンについては本来はリューリカ設計局製 AL - 41F エンジンを搭載する予定だったが、優先順位などの関係で Tu - 160 爆撃機と同じクズネツォフ設計局製 NK - 321 ターボファンエンジンを搭載することとなった。そのせいで機体の形状に変更があったりしたため運動性はあまり良くない。だが、Yak - 203 は予定通り AL - 41F を搭載できたため所定の性能を持っている。

そもそもはキエフ級空母やトビリシ級空母と言った比較的小型の空母のみに搭載される予定であったが、正規空母に搭載する MiG - 41K の開発が難航しているため増産され大型空母群にも搭載された。MiG - 41 がハイとすれば Yak - 201 はローである。愛称は「ソーコル（隼）」、NATOコードネームは「フリーハンド」。

解説

スペックはソ連の Yak - 141 を参考にしている。なお Yak - 201 は実際に 80 年代末期から 90 年代初期に計画されたがソ連崩壊によりモックアップさえ作られなかった。ペーパープランでは F - 35B によく似た戦闘機であるが、時系列と採用している技術で言えば F - 35B が Yak - 201 のそっくりさんと言うべき。

* F / A - 22N

乗員：1 名

全長：18.5 m

翼幅（最大）：19.1 m

空虚重量：17,700 kg

最大速度：M2.3

航続距離：3,600 km

武装

M61A2 20 mm機関砲（弾数350発）

ウェポンベイ + ハードポイント × 4 最大搭載重量6
tほど

運用

アメリカ海軍

アメリカ海兵隊

NATF計画(Navy Advanced Tactical
Fighter:海軍先進戦術戦闘機)に基づいてグラマン社が
開発した。F-22とは部品の約3/4割が共通化されている。F
-14やF/A-18を転換中。可変翼を採用しているが、メリッ
トがあまり無い上に重量が予想より増し、ステルス性も落ちてしま
ったために批判されている。ただしF-14に類似した姿のためかパ
イロットや一般人からのウケは良い。愛称は「ボブキャット」。た
だし一般人には「トムキャット」「トムキャット1」などと呼ば
れることも多い。早速F/A-22Nを主役に『トップ・ガン2』
なる映画も封切り予定。

アメリカ軍が介入した戦争ではよく見られる常連さん。Su-2
7やMiG-29、はてはラファール、F/A-18と言った相手
を多数屠ってきており、アメリカ軍の発表では喪失は無い。ただし
ソ連の観戦武官や軍事顧問は数機を撃墜したと主張している。

解説

史実のNATFをもとに設定。しかし「F-22の可変翼バー
ジョン」と言われてもどんな物か思いもよらないので想像図を探し
てみたら、「F-22の面影がわずかにあるF-14」と言った感じ
じ。これが飛んでいたらF-14ファンにはウケが良かったかも。

しかしジョークとしか思えない。しかし、「可変翼かつステルス」
って明らかに矛盾しているような。

ちよこつと用語解説

*AWACS

Airborne Warning And Control Systemのアクロニム。空中警戒管制機などと訳される。大型機の上に大きなキノコのようなレーダードームを乗せた飛行機のこと（もちろんそういう物ばかりと言うわけでも無いが）。役割は簡単に言えば空軍基地の管制塔が空を飛んでいるような物。レーダーで敵を発見するとともに戦闘機を誘導して敵を攻撃する。ある意味では戦闘機よりも重要。基本的に作戦域のはるか後方を飛んでいる。

*AEW

Airborne Early Warningのアクロニム。早期警戒機などと訳される。基本的にはAWACSと同じだが管制能力が無い。とは言うものの極初期の物を除いてほとんどの機種はAEW&Cと呼ばれる、限定的ながら管制能力を有している物である。ベース機体は中型機が多く、たまにヘリコプター。管制能力の高さの順で言うとAWACS>AEW&C>AEW

なお、作者が大学受験に突入の為、更新などが遅れますが平にご容赦願います。

第七話：O v e r t u r e / 2

煤けた色合いの檜で出来たテーブルの上に潇洒な蛍光灯のシャンデリアがぶら下がっている。ミハイル・アナトリエヴィチ・シユレパコフはテーブルに肘を付きひどく気がかりな様子でシャンデリアを見つめていた。

彼は四十代と若手ながらもソ連共産党の政治局と書記局の両方に籍を置く高官、つまりソ連の最高指導者候補の一人であるが、イデオロギー担当書記であるため事実上のNo. 2として扱われている。ちなみに、いつの時でもそうだがいかに顕官として扱われる地位にいても政治局か書記局のどちらかにしか所属していない場合は双方に所属している者に比べると政治的な影響力が大幅に落ちる。

アルテム・イワノヴィチ・スラビアモフ書記長はソ連の第九代最高指導者である。もっとも諸外国では八代目として扱われたりするが、三代目がフルシチョフと言う時点で既に間違っているのだから仕方無い。

アンドロポフが採用した余剰農産物の処分の自由化や、条件付きながら私企業を認めたこと、出産奨励策による人口の増加によりソ連の沈滞していた景気はだいぶ上向きとなり、GDPは世界第二位を維持していた。が、国民の間では生活水準の向上により表立った不満は出ていないが格差が広がってきていた。

ロシア帝国を崩壊に迫いやり、世界初の社会主義国家たるソビエト連邦??理想と現実の間にある、地平線の向こうまでずっと広がっているシベリアの荒野はこの際置いておこう??を建国させた原動力が超格差社会であったロシア帝国の体制に対する労働者や兵士

の不満である。ソ連の指導部で無くとも誰でもそうだろうが、ロシア帝国の皇族や貴族のように悲惨な最期を迎えるのはまっぴらごめんである。一家皆殺しの上硫酸をかけて処理されたり、自分で文字通り墓穴を掘らされて掘り終わった瞬間に背後から射殺されたり、目の前で妻子が陵辱されるのを見せつけられた後に手斧で滅多うちにされるなどが自分に降りかかるかもしれないと言うことは考えるだけで嫌なものだ。例えばそれが暇潰しとして農夫にボルゾイ（狼狩り用の俊敏な大型犬。ロシアの貴族や地主に愛された）をけしかけて噛み殺させた報いだとしても。

そこでソ連の指導部では派閥が出来ていた。一つは資本主義的な政策を続けた上で国民の生活水準を持続的に向上させて不満を打ち消そうとするグループ、もう一つは経済に対する統制を強めて格差を埋めようとするグループに分かれていた。

前者はとりあえず今の政策を続けていれば良いと言うのが長所だが、生活水準の持続的向上と言うのが難しい。それに失敗すれば格差に不満を持った民衆により惨劇が引き起こされる。その上、資本主義的な政策はそれ自体がソ連の存在意義を危うくしているとも考えられた。現状の政策の下地となったレーニンのネツプにしても「発電所やインフラ設備などの官制高地を政府が掌握しておけば社会主義である」「資本主義的な政策だがロシアにおいてはそれでさえ社会主義の発展に寄与する」などどこじつけ感のある説明が行われたのである。要するに国是である社会主義および共産主義に反していると言えないこともない。

一方の后者は格差を埋めることで惨劇を回避できるが、いくら官制高地を抑えていると言っても経済活動を思いのままに統制することとは難しい。通商関係にある諸外国の行動にも左右されるからだ。ただし、大失敗をやらかしても前者のように一気に好景気からどん底へ、とはなりにくい。しかし現状の政策から利益を得ている者からは当然の如く不評である。

そういうわけで現在ソビエト共産党内では「自由派」「統制派」なる派閥??派閥と言っても日本のそのように毎日派閥内の会議を開いたりはいないため団結力が強いわけでは無い??の対立が激しかった。

シュレパコフやKGB議長ヴァレンティン・イワノヴィチ・スクラレフスキー等は統制派の筆頭として、組織担当書記アフナシー・マルコヴィチ・トリペンコや国防産業担当書記アルカデー・レオポルドヴィチ・マルトフ等が自由派の筆頭として対立しているのだが、はつきりしない人物が一人おり、それが書記長たるスラビアモフだった。

スラビアモフはシュレパコフの案を取る時であれば、トリペンコの献策を受け入れることもある。よく言えば柔軟、悪く言えば両派どちらともに「いい顔」をしているわけだ。

しかし現に権力を握るべく闘争に勤しむシュレパコフにはたまったものではない。それはトリペンコ達にも同じである。

シュレパコフが不安なのはスクラレフスキーから最近トリペンコがスラビアモフと接触する回数を増やしていると言うことを聞かされたからだ。

何事なのかはよく分からないが、それ故に不安である。

もしかするとスラビアモフがトリペンコに丸め込まれたかもしれない、またはトリペンコがあることないことを吹き込んだかもしれない。

彼が鬱々としていると扉が開き、封筒類を山と抱えた若い女が入ってくる。彼女、ナターリヤ・ニコラエヴナ・ラズモフスカヤはシュレパコフの秘書であった。

「あのー、バレンティン・スクラレフスキー氏から書類がたくさん来ておりますが……」

「分かった」

手短に答えるとラズモフスカヤは出ていった。甘酸っぱい、かぐわしい香りがふわりと鼻をくすぐるがシュレパコフは顔色一つ変えない。

スクラレフスキーは西側では密かに『ソ連史上最高のスパイマスター』などというあだなを報ぜられているらしい。確かに防諜に大いなる貢献をしているがシュレパコフにはどうも彼が愚鈍に思われて仕方無い。

もちろんメールや電話は盗聴やなんやかやがあると聞くから無理としても、わざわざ封筒で、それも大量の封筒に入れて送ることは無いはずである。しかも本名を出して。「イワーシコ・メドヴェーシコ」等と偽名を使って送るぐらいの配慮は必要なところである。そうでなくてもシュレパコフについている者もそうだが、要人の警護はKGBの第九局の局員である。つまりスクラレフスキーの忠実な部下であり、彼らを通せば一切が外部に漏れずに済む。

スターリン・ゴシツクと呼ばれる様式で建てられた「セブン・シスターズ」のうちの一つ、ホテル・レニングラードがその古典的な厳めしさを持つてそびえ立っている。

その足下にあるコムソモールスカヤ広場を望むシュレパコフのマンションの一室でスクラレフスキーは大袈裟に両手を広げた。

「???冗談ではない。奴らは本気だ。今年の十月革命記念式典が終れば全面大攻勢に打って出るつもりらしい」

「バカなことを」

「いいかミーシャ。奴らの政策には確固たる裏付けが必要だ。経済的な裏付けが。どっちが先かは知らんが資源戦略と言う点では両者が組まない可能性の方が低い。それにマルトフだっているわけだ」

「……ヴァーリヤ、君の言うとおりのようだ。しかしだな、彼らは……簡単な算術が出来ないのか……我々が直接手出しをしていない

からこそあちらも黙って援助に留めているのに……後が面倒なことになると言うことが分らないのか？」

「カタストロフ」とのシュレパコフのぼやきにスクラレフスキーは嘲るような口調で返事を返した。

「奴らは『最強のソ連軍』があれば何をしても大丈夫と考えてるんだよ。例えそれが『ぼくがさいきょーだとおもいこんでるそれくん』でもな」

スクラレフスキーはしばし黙ってシュレパコフの顔を見る。

蛍光灯の冷たい光が食卓のテーブルを硬く照らし出す。

「正直言ったところ、これを信じたくは無いが、今ならまだ止められるんじゃないのか」

シュレパコフのすぎるような目つきをスクラレフスキーは見返した。彼はワイングラスをテーブルに置くと自身の白髪をいじりながら答えた。

「同じ考え方の人間で重要な地位の人物が一人いる。同志マーカル・ペトロヴィチなんだが」

「……マーカル・ペトロヴィチ？ ブルナーシェフ局長か？ 君達とは仲が悪いんでは？」

「おいおい、我々は決して彼らと仲が悪いわけでは無い。あんたは西側のスパイ小説でも読みすぎたんじゃ無いのか。そうか、それなら??」

突然スクラレフスキーが真顔になった。

「同志ミハイル・アナトリエヴィチ、あんたを西側のスパイとして逮捕する」

「おいおい」

「もちろん冗談だ。こっちの部下にも『ジェームズ・ボンド』って奴がいてな、ふはは」

第七話：Overture / 2（後書き）

誠にお久しぶりです。無事に大学受験も終わり更新再開です。ただ、政治パートが相当多くなるので書くのがだいぶ遅れますが。

一応今回で主要人物の顔見世は終了し、今度からはだいぶ濃い話を展開出来るかと。私の実力が伴えば、ですがw

第八話：茶番劇

アフリカのギニア湾にソ連艦隊が展開していた。最新鋭のオクチャープリスカヤ・レヴォリューツィヤ級原子力空母の二番艦『ヴォーリヤ』やトビリシ級空母『キシニョフ』、最新鋭のシチエルバコフ級原子力巡洋艦にして艦隊旗艦の『ゲオルギー・マレンコフ』、キーロフ級原子力巡洋艦の『ユーリイ・アンドロポフ』と『ジダーノフ』を中心に、駆逐艦やフリゲート艦などが外輪をなしている。上空から見れば見事な輪形陣を見ることが出来るだろう。もつとも外輪をなす駆逐艦などは遠くて中心部にいる大型艦の艦上からは米粒のようにしか見えない。はつきりと艦影を見せているのはただ一隻、『ジダーノフ』に併走しているウダロイ2級大型対潜艦『アドミラル・クチエロフ』のみであった。

しかし、こうも見事な艦隊を作り上げたソ連だったがその事情はお寒いものであった。艦隊の拡大に力を入れたは良いが予算配分がそれに傾注されてしまったため、もともと遅れていた港湾の整備がさらに遅れることになってしまった。したがって電気や蒸気を十分に供給できず、セヴァストポリやムルマンスク、ウラジオストクのような主たる軍港でさえ艦はなかなかエンジンを休ませることが出来ない。逆にベトナムから租借したカムラン湾のニャチャン港、アンゴラから租借しているルアンダ港のほうがその点では充実していると言っありさまである。すなわちソ連の艦艇は寿命がかなり短いのであった。

赤道直下、常夏の海はロシア人にとってはいくらなんでも暑すぎた。甲板を散策するものなどほとんどおらず、クーラーの効いた艦内に兵員達は閉じこもっていた。飛行甲板の要員は暑さによるめきつつ自分の仕事を黙々とこなす。もはや暑い暑いと愚痴をこぼして

いる余裕はなかった。雲ひとつ無い空、陽光はきらきらと照りつけ海面からは閃光が発される。海面から立ち上るゆらぎが遠くを走る僚艦のシルエットを歪めている。

空母『ヴォーリヤ』の甲板にぶら下がっている温度計は42度を記録していた。甲板自体が熱せられ甲板上は焦熱地獄と化していた。一人の整備兵が何かに蹴躓^{けつまず}いて転び動かなくなった。しばらくすると気づいた同僚達の叫び声上がり、担架を持った救護兵達が駆けつける。口から泡を吹き、白目を剥^むいて動かない整備兵をもつこで土くれを運ぶかのように艦内へと運び去っていった。

甲板上の喧騒は収まった。またもや沈黙が広がり全員がよるめきつつ黙々と仕事をこなしていた。見えない脅威に強制労働をさせられているかのような彼らの頭上を数羽のウミツバメが飛んでいた。

空母『ヴォーリヤ』の広大な艦橋はクーラーの効いた快適な空間となっていた。だが、どうも落ち着きの無い空間となっている。イワン・フォードロヴィチ・レオーノフ司令長官は落ち着き無く艦橋内を歩き回り、たまにレーダーの画面をオペレーターの背後から覗き込む。艦長のイリヤ・マカロヴィチ・モジャイスキー大佐は自分の軍服についている勲章をいちいち触って確認し、ついでに部下達へ服装についてごちゃごちゃと小言を垂れ始めた。

「フェフェル大尉、襟が歪んでいる。アルセニエフ少尉、君も帽子の被り方が悪い。さつさと直したまえ」

レーダーの画面では四つの輝く点が艦隊へと近づき、その輝点の横にはオペレーターが操作するたびに情報がちまちまと表示される。

「ごきげんよう。こちらストレラ。着艦に移りたいので指示を願う」
この音声に艦橋では緊張が走る。突然あわただしい雰囲気が見え、レオーノフ司令長官やモジャイスキー艦長はさらにせわしく歩き回る。

「こちらヴォーリヤ。ストレラ、機首方位三十度に右旋回、高度五千フィートまで降下せよ」

モジャイスキー艦長はいよいよ忙^{せわ}しく動き回り、レオーノフは幕僚を連れると扉から出て行った。

「こちらストレラ。着陸許可を願う」

「こちらヴォーリヤ。本艦は方位三十二へ二十ノットで進行中、合成風力は方位四〇から二十八ノット、着陸を許可する」

オペレーターは一息に言うと言の外の外を見た。Yak - 203 K艦上戦闘機の三機編隊にエスコートされた『ストレラ』ことYak - 44が空の向こうから現れる。Yak - 44には艦上輸送機型のYak - 44とAWACSであるYak - 44Eの二つの派生型に加えて少数が生産された要人輸送用のYak - 44Bが存在するが、飛来するのはそのYak - 44Bであった。

下を航行する『ヴォーリヤ』には目もくれずYak - 203 Kはフライパスし、Yak - 44Bは降下するとほとんど減速せず凄まじいスピードで飛行甲板に着艦する。Yak - 44Bは二基のターボプロップエンジンと二重反転プロペラを熊蜂のように響かせながらほとんどつんのめるような格好で急に停止した。しばらくしてからゆっくりと後ろに下がり、甲板の要員は車輪止めやらを持って駆けてゆく。

イワン・グリゴリエヴィチ・サケラーリ参謀総長は何食わぬ顔でYak - 44Bのタラップを降りた。心なしか青ざめた参謀本部付きの将校達や護衛が降りてくる。空母着艦を始めて体験したこともあり、アレステイングワイヤーでひっかけてほとんど減速などしていない機体を無理やり止めるといふ乱暴な着陸方法に心胆を凍らされたらしい。ただ、サケラーリ参謀総長が平然としているのは簡単な話であった。彼はもともと北方艦隊の『ソヴィエト連邦英

雄二度受賞ボリス・サフォーノフ名称第二七九艦上戦闘連隊』という極めて長い正式名称を持つ航空隊にて連隊長をしていた優秀なパイロットである。彼が現役のパイロットだった頃の八十年代初頭はソ連の空母など存在しなかったが、蒸気カタパルトやアレステイングワイヤー、スキージャンプなどが備えられた訓練施設『ニートカ』が存在した。

故に着艦直後の機内にて泡を吹きかねない部下達を見てサケラーリは意地悪い笑みを浮かべていた。その後で『ストレラ』の機長や操縦士に「素晴らしい着艦だった。私が現役の頃でもこうは上手く行かなかっただろう」とお褒めの言葉を与えて降りてきたのである。

サケラーリは『キシニョフ』に護衛のYak-203Kが着艦しているのを横目に認めた。

「参謀総長、空の旅は如何でしたか？」

「うむ同志よ。機内食のビーストロガノフも美味だったし、久しぶりの空の旅はなかなか快適だったよ。ただ部下達はちょっとお疲れのようだがね？」

彼は髭面を震わせて笑い、出迎えに立ったパイロット達もつられて笑みをこぼす。が、パイロット達は青白い顔の将校達が不愉快そうな表情を浮かべたのに気づいて表情を直した。

参謀総長はカツと照りつける太陽をまぶしそうに見上げる。口ひげは一気にわいてきた汗で湿り、唇に一滴の汗がしたたり落ちた。

「しかし、こんな暑いところでご苦労、ご苦労」

「はっ、では艦橋へお入りください」

モジャイスキーやレオーノフとともにサケラーリは艦橋へと入っていく。

「同志司令長官、これは見事な艦隊だな。素晴らしい」
サケラーリは視界に入る数隻の大型艦艇を見つめた。

「ありがとうございます。現在この部隊には本艦を始めとし1143・5計画型重航空巡洋艦（トビリシ級空母）が一、1203・8計画型重原子力ロケット巡洋艦（シチエルバコフ級原子力ミサイル巡洋艦）が一、1144・2計画型重原子力ロケット巡洋艦（キーロフ級原子力ミサイル巡洋艦）が二、1100・1計画型艦隊水雷艇（オピトヌイ級駆逐艦）が四、956U計画型艦隊水雷艇（ソヴレメンヌイ級駆逐艦）が三、1156・0計画型大型対潜艦（レズキー級駆逐艦）が一、1155・1計画型大型対潜艦（ウダロイ2級駆逐艦）が四。また、それ以外にも多数の警備艦が所属しております。もちろん、ルアンダ港にて休養を取らせている艦艇もあります。すゆえ、実勢力はさらに大きなものとなっております」

凄まじい早口で一氣にまくし立てたレオノフにサケラーリは顔をしかめる。いきなり艦隊の構成をまくしたてられても困ると言うものである。彼はレオノフから視線を外すと飽きもせず、またもや窓の外を眺めた。シチエルバコフ級やキーロフ級と言った巡洋艦よりも、どうやらパイロットの血が騒ぐのか空母の甲板設備のほうに気になっているらしい。双眼鏡はやたらと俯角をとり飛行甲板へと向けられている。

「うむ、素晴らしい。素晴らしい。ところで同志艦長。立派な空母だな。私も陸上の『ニートカ』ではなくこんな空母に自分の手で着艦したかったよ。内心ではアメリカの空母のパイロットが羨ましかったもんだったが、これで我々はアメリカと並び、そして超えることができるな」

手放しに褒める参謀総長を前にして司令長官、艦長ともにこれで中央からの覚えも良からうと笑みを抑えきれない。実際に褒められているのは空母の立派さなのだが。

艦隊の説明やらを一通り受けた後、七面倒なことにへりで原子力ミサイル巡洋艦『ゲオルギー・マレンコフ』に移乗したサケラーリ

参謀総長やレオーノフ司令長官の一行は『ゲオルギー・マレンコフ』艦長のアレクサンドル・イワノヴィチ・ナウメンコ大佐とともに『ゲオルギー・マレンコフ』のCICへと入っていた。

暗いCICは液晶の画面の明かりに照らし出され、神秘的な風景とも言えないことはない。CICの壁に設置されたひとときわ大型の液晶パネルにはアフリカ東海岸の地図が大きく表示され、データリンクシステムでソ連やその友好国の運用する艦船や偵察機、はたまた偵察衛星などから知らされてきた情報が所狭しとひしめいている。サケラーリは目をしばたたかせて画面を眺めていた。

「今回の実験においては1203・8計画型重原子力ロケット巡洋艦『ゲオルギー・マレンコフ』がアンゴラ領内にて発射されたR-5中距離弾道ミサイル二基を大気圏外で破壊します」

「ふむ。成功するかね？」

「ええ。R-5程度の中距離弾道ミサイル程度ならば易々と迎撃できるでしょう」

自信に満ち溢れた答えを返す担当の砲雷士官をサケラーリはたしなめた。

「君、君。油断大敵、成功するものも失敗してしまうぞ」

この実験はソ連の国威がかかっていた。アメリカ海軍はほんの数ヶ月前に多弾頭型のSM-3ミサイルで弾道ミサイル二基の同時迎撃に初めて成功し、ソ連はその後塵を拝している状態であった。党中央からの命令を受けたソ連海軍では弾道ミサイル二基を一隻の巡洋艦のみで誘導する二基の迎撃ミサイルで迎撃するプランを立てた。その実験に白羽の矢を立てられたのが『ゲオルギー・マレンコフ』である。『ゲオルギー・マレンコフ』の艦橋上部に搭載された『マルス・パッサート』フェーズドアレイレーダーがその重責を担うこととなる。

西側では『スカイ・ウォッチ』、ソ連での『マルス・パッサート』と呼ばれるアメリカのAN/SPY-1に相当するフェーズドアレ

イレーダーは四面のフェーズドアレイアンテナを備えた大型レーダーである。周波がSバンドが、通常時の最大探知距離が五百キロ以上と言うのもよく似ている。とは言えこちらは、対空のみならず対水上用にも使う多用途レーダーなのではあるが。

一九七〇年代に開発が開始され八十年代後期に完成したこのレーダーはキエフ級空母『バクー』や、『リガ』を除くトビリシ級空母の三隻でテストが重ねられ、またアメリカのイージスシステムによる弾道ミサイル迎撃実験などに影響されて改良も重ねられた。名称こそ変更はされていないものの、『バクー』の頃のマルス・パツサートと『ゲオルギー・マレンコフ』を始めとしたシチエルバコフ級の搭載するものはほとんど別物と言っても良い。同時追尾目標数は八十から数百へ、同時交戦可能数も数十へと向上した。その性能とフェーズドアレイレーダーの特性を生かし、二つの弾道ミサイルに対して二つの迎撃ミサイルを同時に誘導すると言う試験に従事することとなった。もっとも、弾道ミサイルと巡航ミサイルを一基ずつ同時に迎撃するという実験はアメリカが行って成功していた。

ソ連の早期警戒衛星システムは二つある。一つは『モルニヤ軌道』と呼ばれる楕円軌道にて四基の早期警戒衛星を展開する『オコ』。もう一つは『オコ』を補完すべく東経二十四度、西経十二度、西経八十度の静止軌道上一基ずつ早期警戒衛星を展開している『プログノズ』である。ちなみにどちらのシステムの衛星もソ連のほとんどの衛星と同じくコスモスの名称と通し番号で呼ばれている。コスモスはあと二年もしないうちに二八〇〇番台に到達すると確実に考えられていた。

「『コスモス2759号』がアンゴラ南部にて赤外線を感知、弾道弾発射と思われる」

「マルス・パツサートが走査を開始！」

暗いCICに緊張が走る。広大な宇宙空間から戦闘機よりも小さな弾頭を見つけ出すのは並大抵のことではない。が、マルス・パツ

サートは見事にそれを見つけ出した。

「目標確認。諸元入力開始」

「『コスモス2759号』アンゴラ西部にて赤外線を感知。弾道弾と確認。先の弾道弾を『飛翔1』、今次の弾道弾を『飛翔体2』と仮称する」

実験は順調に進んでいた。二発の弾道ミサイルが発射され、マルス・パッサートは二つの正確な位置を割り出すことに成功した。

「『アドミラル・クチェロフ』から通信です。『未確認の潜水艦を探知。方位は0-4-2、距離は二万から二万五千。音響パターンは解析中』」

突然の報告にレオーノフはCICにいた参謀本部付きの将校をかきわけモニターを覗き込んだ。ウダロイ2級駆逐艦『アドミラル・クチェロフ』を示す標識は『ゲオルギー・マレンコフ』の前方にいるキーロフ級ミサイル巡洋艦『ジダーノフ』のすぐそばにあった。あきらかに輪形陣の中に入り込んでいる。

「味方じゃないのか。輪形陣の中だぞ？」

「音響パターンが異なる??新しい通信です。未確認潜水艦はシーウルフ級と判明」

「なに??—ええい、『ドラコーン』と『リエーフ』は何をしていたんだ!」

レオーノフの大声がCICの空気を引き裂く。アクラ2級攻撃潜水艦の『ドラコーン』と『リエーフ』が艦隊にて警戒に当たっていたがシーウルフ級攻撃潜水艦が艦隊の中心に近づくことを許してしまっていた。司令長官の怒号と参謀総長の冷やかな表情がよく冷房の効いたCIC内にいる要員の体感温度をさらに冷やす。

「ヘイフェツ中尉、ソナーに反応はなかったのか？」

「ええ。反応はありません」

艦長の問いに対するソナー士官の無情な答えに司令長官は頭を抱えた。この状況だと『アドミラル・クチェロフ』と『ジダーノフ』

は優にアメリカの魚雷の射程圏内に入ってしまったっているし、この旗艦『ゲオルギー・マレンコフ』も例外ではない。『アドミラル・クチェロフ』の発信したデータは高速データリンクによって全艦隊内で共有されており、『ゲオルギー・マレンコフ』のモニターにも表示されている。潜水艦の予想位置はいくらなんでも近すぎた。

「『ジダーノフ』より通信、『シーウルフ級潜水艦を探知。方位は0-3-8。距離は二万五千から二万七千』」

「同志イワン・フョードロヴィチ。アメリカはよほど静かな潜水艦を造れるんだね」

サケラーリは落ち着いた声でつぶやいた。レオーノフはぎりりと歯ぎしりをし、サケラーリの意地の悪い物言いにも反応する余裕がない。

「とりあえずウダフの用意をしておいてくれ」

艦長も困惑した表情で担当の士官に囁いた。まさか魚雷を撃つてくることはないだろうが、念には念を入れておくべきだと彼は思った。それにウダフことRBU-12000はそんなに新しいシステムではないが素晴らしい性能を誇り、魚雷一発程度なら一斉射につき八割近い確率で破壊できるし発射する際にも事前に数分程度の準備を行うだけでよい。

「『飛翔体1』に対する迎撃弾発射まで十秒前、九、八……」

単調なカウンtdownがCIC内を駆け抜ける。突然現れたアメリカの潜水艦にCIC内で艦隊幹部達は大騒ぎしていたが、その思惑や事態とは全く関係なくミサイル迎撃実験を進めることが出来ていた。

「三、二、一、S-500F発射！」

後部甲板にある八連装のリボルバー式VLSから一基の迎撃ミサイルが白煙と共に空中へ飛び出す。空中で速度が落ち始めたかと思うや否やロケットモーターが点火され、橙色の明るい光を放ちながら夕暮れの空を飛び上がった。数秒後には同じようにしてもう一基

のミサイルが後を追うように上へ飛んでいった。

この風景を副長は艦橋で眺めていたが、内心は気が気でない。CICにいる艦長からの命令を聞き逃さないようにスピーカーにかじりついていた。

そのスピーカーからはCIC内の声がかすかに流れてくる。

「『飛翔体1』迎撃まであと十秒、九、八……」

「同志ナウメンコ艦長！ 資本主義者のボロ潜水艦を今すぐに撃沈せよ！ 司令長官たる私が許可する」

「やめないか！ レオーノフ中将！ やめたまえ！」

興奮気味のレオーノフの喚き声といつもは物静かな政治将校ゲルギエフの焦ったような声が聞こえる。副長はさらに青ざめた。いくらなんでも「第三次世界大戦の引き金を引いた軍人達」の中に名を連ねることはしたくない。もっとも、歴史が残るかどうかは別問題だが。

「同志司令長官、シーウルフの詳しい位置が分からないため攻撃は不可能です」

「四、三、二、一、零。目標の反応消失しました。引き続き『飛翔体2』に対する誘導を行います。迎撃まであと二十秒」

ナウメンコの静かな声とミサイル迎撃成功の知らせにレオーノフの興奮はいささかおさまったらしい。荒い息のみが聞こえる。副長は額の汗を拭きつつふと横を見た。見張りの当直士官が副長の顔を髭面に泣きそうな表情を浮かべて見つめていた。

「第三次世界大戦の危機は去ったんだから喜べ」

「いえ、あよ、副長殿、緊張れ顔が動かんれす」

「緊張で？ ハハ、そりゃ分かるよ」

副長は乾いた笑い声を立てながら残照に照らされて橙色に染まる海を見た。一機のヘリコプターが小さく赤い空を背景にして飛んでいる。そしてまたもや顔をこわばらせた。

「前言撤回だ。いいかげんにしてくれ……」

橙色の海面に黒い、長い物体がくつきりと浮かんでいた。

淡々と進む実験の中、CICの一角は騒がしかった。『アドミラル・クチエロフ』の艦載ヘリが送ってきた映像が映し出されている。一隻のシーウルフ級潜水艦が黒いセイルと船体を半ばまで海面上に出していた。その背景には小さく『ゲオルギー・マレンコフ』と『ヴォーリヤ』が写っていた。二隻は既に「撃沈」されていたのである。レオーノフは右手をひくひくと痙攣させていた。もしも彼が本能のまま動いたなら、そのシーウルフ級潜水艦はたちまちロケット弾やら魚雷やら爆雷やらの集中砲火を食らって海の藻屑となるに違いなかった。

「目標の反応消失。目標全機撃墜を確認しました」

砲雷士の報告に小さな歓声上がる。が、青筋を額に浮かべて剣呑な雰囲気振り撒くレオーノフに遠慮して小さな声であった。

ナウメンコ艦長はレオーノフに遠慮して小声で参謀総長に尋ねた。

「この実験は成功したのでしょうか？」

「いいや、同志ナウメンコ君。この実験は成功でもアメリカには敗北したよ。むこうがその気なら迎撃ミサイルを撃つ前に我らが『ゲオルギー・マレンコフ』は沈められていただろうからね。しかし迎撃実験そのものはよくやった。上出来、上出来だ」

潜水艦を双眼鏡で眺めながらサケラーリは呟く。レオーノフは潜水艦を忌々しげに睨み付けていた。

第八話：茶番劇（後書き）

解説

『オコ』と『プログノズ』

どちらも実在。二十四時間地球全土を監視できない『オコ』の死角を補うためのシステムが『プログノズ』。後者については現在東経二十四度、西経十二度（ヨーロッパ、アフリカを監視）が運用されていて、西経八十度（アメリカ大陸を監視）のものはバックアップ用だという説もある。ただ、軍事機密の塊みたいなものなのでこちらも詳細はさっぱり分らない。

『マルス・パッサート』

実在のフェーズドアレイレーダー。空母『バクー』と『アドミラル・クズネツォフ』に搭載され、ソ連期待のレーダーだったがソ連崩壊により命運を絶たれた。AN/SPY-1などと比較してもほとんど同じ性能だが同時追尾目標などで劣る。

『ニートカ』

実在の施設。黒海沿岸のサキ飛行実験センターにあり、上記カタパルト、スキージャンプ、着艦拘束装置などを備える。現在は蒸気カタパルトは放棄されている模様。

シチエルバコフ級原子力ミサイル巡洋艦

同型艦

シチエルバコフ

カーメネフ

ジノヴィエフ

ゲオルギー・マレンコフ

基準排水量：26,700 t

全長：271 m

全幅：30.2 m

速力：30ノット

武装

A - 192 - 5 P - 10 130 mm速射砲 × 1

P - 1200 長距離対艦ミサイルVLS × 24

S - 500 F 長距離対空ミサイル8連装VLS × 12

3 K95 短距離対空ミサイルVLS × 24

ウダフ 対潜ロケット10連装発射機 × 1

RBU - 1000 対潜ロケット5連装発射機 × 2

5連装533 mm魚雷発射管（RPK - 6 対潜ミサイル発射可能） × 2

パラシ CIWS × 6

キーロフ級の後継として建造された。対水上、対潜、対空に使える万能艦で、ステルス性にも留意して建造された強力な巡洋艦。ただし見た目は常識的な物なのでさほどステルス性能はよくないと思われるが、130 mm速射砲のシールドや上部構造物はRCS面積の小型化に留意し、主立った装備はVLS方式、対潜ロケット発射機も格納式なのでそここのステルス性能はある。データリンクシステムも充実しているため火力の遠投能力にも優れる。

搭載しているP - 1200はP - 700の後継で射程距離約1000 km、弾頭は800 kt核弾頭または1 tの高性能炸薬を選択可能、そして総重量9 tを誇る巨大ミサイルである。ただし汎用性が低い決戦専用ミサイルとなっているのは否めない。地域紛争においては役立たずの誹りを免れないだろう。

なお五番艦がレニングラードのバルチック工廠にて建造中である。

解説

完全に架空。キーロフ級を設計コンセプトはそのまま、さらに拡大したものと思ってもらえればよい。

キーロフ級原子力ミサイル巡洋艦

同型艦

キーロフ

フルンゼ

カリーニン

ユーリイ・アンドロポフ

ジェルジンスキー

ロシア

ジダーノフ

スヴェルドロフ

ジェレズニャコフ

基準排水量：24,300 t

全長：252 m

全幅：28.5 m

速度：30ノット

武装

AK - 130 130 mm連装砲 × 1

P - 700 M対艦ミサイル VLS × 20

S - 300 F長距離対空ミサイル 8連装 VLS × 12

3 K95 短距離対空ミサイル 8連装 VLS × 8

ウダフ 対潜ロケット 10連装発射機 × 1

RBU - 1000 対潜ロケット 5連装発射機 × 2

5連装 533 mm魚雷発射管 (RPK - 6 対潜ミサイル発射可

能) × 2

CADS - N - 1 CIWS × 6

たぶん実用化された中では初めてのステルス軍艦だったが、リーダーが就役当初よりはるかに優れている今となってはほとんどその効果は無い。近代化改装が行われ、対空能力に関してはイージスシステム・ベースライン4に相当する能力を有している。

P-700MはP-700の改良型で射程距離は900kmのままだが電子機器の更新によりシースキミング能力などが向上している。

解説

史実のキーロフ級原子力ミサイル巡洋艦（現：アドミラル・ウシヤコフ級）と同一。その巨大さゆえにジェーン海軍年鑑、ブリタニカ百科事典では巡洋戦艦に分類される。実際はジェルジンスキーは起工されたがソ連崩壊後に中止、ロシアは艦籍編入されたが起工されずに終わった。ジダーノフ以下は名前はそうだったと言われているが、それ以外は不明。排水量ではドレッドノートを上回り、長さでは長門を上回る、戦後に建造された空母、強襲揚陸艦を除く水上戦闘艦としては世界最大。

オクチャープリスカヤ・レヴォリユーツィヤ級原子力空母

同型艦

オクチャープリスカヤ・レヴォリユーツィヤ

ヴォーリヤ

ソヴィエツカヤ・ロシア

ソヴィエツカヤ・ベロルーシヤ

ソヴィエツカヤ・ウクライナ

基準排水量：84,000 t

全長：340 m

全幅：78 m

速力：30ノット

武装

3 K 9 5 短距離対空ミサイル V L S × 2 4
R B U - 1 2 0 0 0 対潜ロケット 1 0 連装発射機 × 4
パラシ C I W S × 8
A K - 6 3 0 M 1 - 2 C I W S × 8
艦載機（目安）：固定翼機 7 0 機、回転翼機 1 5 機

ソ連の誇る巨大空母。ウリヤノフスク級原子力空母を大型化した物。ただし対艦ミサイルは降ろされ、スキージャンプも廃止されている。満載排水量は十万吨に迫る。が、ソ連には空母の運用経験が少ないためいろいろトラブルも多い。

解説

C I W S が二種類（パラシ、A K - 6 3 0 M 1 - 2）で合計 1 6 基という豪華さ。個艦防御用対空ミサイル 3 K 9 5 も搭載と個艦防御能力はピカイチ。C I W S 積みすぎとか、2 種類も積むなんてバカだろ、互換性はどうするんだなんてツツコミはなし。実際に起工されたウリヤノフスク級空母もほとんど同じ構成で建造されている。ちなみにパラシは C A D S - N - 1（コールチク、カシユタンなどとして著名）の後継である。最近開発されたが近未来的なダサさ。

トビリシ級空母

同型艦

トビリシ

リガ

キシニヨフ

アルマ・アタ

基準排水量：5 5 , 0 0 0 t

全長：304.5m

全幅：72m

速力：29ノット

武装

P-700M長距離対艦ミサイルVLS × 12

3K95短距離対空ミサイルVLS × 24

RBU-12000対潜ロケット10連装発射機 × 2

CADS-N-1 CIWS × 8

AK-630M1-2 CIWS × 6

艦載機（目安）：固定翼機30機、回転翼機10機。リガ以降はさらに固定翼機を6機ほど搭載可能

15度のスキージャンプを備えた空母。個艦戦闘能力も重視されており、大型対艦ミサイルであるP-700を発射可能。なおキシニョフ以降は電子機器が一新され、搭載機も増えているため、改トビリシ級とも呼ばれる。また、リガのみは対空レーダーがマルス・パッサートではなく簡易型のフォルム2Mを搭載している。

解説

要するにアドミラル・クズネツォフのこと。ソ連海軍がいわゆる「沿岸海軍」だったことを如実に示している空母で、設計コンセプトは来襲する敵艦隊に対し自艦および陸上基地によるエアカバーの下からミサイル攻撃を行うというもの。

ウダロイ2級駆逐艦

同型艦

アドミラル・チャバネンコ

アドミラル・クチェロフ

レフ・メフリス

グリゴリー・ロマノフ

マルシャル・ヤゾフ

アドミラル・オクチャブリスキー

アドミラル・イサコフ

ゲイダル・アリエフ

マルシャル・フロロフ など19隻

基準排水量：8,900 t

全長：163.5 m

全幅：19.3 m

速度：28ノット

武装

AK-130 130 mm連装砲 × 1

P-270 対艦ミサイル四連装発射機 × 20

3K95 短距離対空ミサイル8連装VLS × 8

ウダフ 対潜ロケット10連装発射機 × 1

4連装533 mm魚雷発射管(RPK-6 対潜ミサイル発射可

能) × 2

CADS-N-1 CIWS × 2

搭載機：Ka-27 PL 2機

強力な対潜能力を誇る駆逐艦であつたウダロイI級の弱点である対水上能力を向上させた汎用艦。が、国際的には駆逐艦に分類されているとはいえないかなりの大きさを誇る。後継としてさらに大型化してしまつたレズキー級駆逐艦が建造されている。

解説

史実のウダロイ2級駆逐艦と同一。実際には二番艦アドミラル・クチェロフがソ連崩壊と予算不足により建造中止、解体されたので就役したのはアドミラル・チャバネンコのみ。

ちなみにゴルバチョフにとっての最大のライバル、グリゴリー・

ロマンフの名前がありますが、となると……言わせんな恥ずかしい
ww

ちなみに後継と設定されているレスキー級は計画のみが存在した。
名称は架空。

アクラ2級原子力潜水艦

同型艦

モルジ

ドラコーン

ティーグル

ウィープリ

ゲパルト

クガル

ルース

リエーフ

ギエーナ など合計31隻

水上排水量：8,140 t

水中排水量：12,770 t

全長：114.3 m

全幅：13.6 m

速力（水上／水中）：11.6ノット／33ノット

武装

650 mm魚雷発射管 × 4

65-76型魚雷、RPK-7対潜ミサイルを12基分。

533 mm魚雷発射管 × 4

USET-80魚雷、シुकヴァール、RPK-6対潜ミサ

イル、RPK-2対潜核ミサイル、RK-55巡航ミサイル、機雷
を28基分。

9K34ストレラSM自衛用対空ミサイル発射機 × 3

高性能だがそれに比例して高価なシエラ級原子力攻撃潜水艦の廉価版とも言うべき潜水艦。船殻がチタンではなく高張力鋼製になっている。ただしシエラ級よりも武装、静粛性などの面で大幅に優れ、一型と三型合わせて12隻しか建造されなかったシエラ級に比してアクラ級は一型、二型合わせて40隻が建造されている。

セイルに搭載された対空ミサイルはあくまで自衛用で浮上時にしか発射できない。

ちなみに乗員からの請願があり90年代から艦名として動物名がつけられている。他の潜水艦もいろいろな艦名がつけられ、都市名や魚の名前、はたまた英雄の名前などさまざま。とはいえ型式によって統一はされている。

解説

史実のアクラ2級と同一。よく知られてはいるが機密のベールは厚く、謎めいた潜水艦ではある。ロサンゼルス級はもちろんとしてヴァージニア級ぐらいとも互角に戦えるのではなからうか。さすがにシーウルフはキツイと思うけど。

クガル、ルースは起工したものの建造中止、それ以降は架空。

シーウルフ級原子力潜水艦

同型艦

シーウルフ

コネチカット

スタージョン

カットラス

フィンバック

ソーフィッシュ

ニューハンプシャー

スコープオン

ガジヨン

水上排水量：7,460 t

水中排水量：9,150 t

全長：107.6 m

全幅：12.2 m

速力（水上／水中）：18ノット／35ノット

武装

Mk.69 660 mm魚雷発射管 × 8

Mk.48魚雷、ハーブーン、トマホーク、機雷などを52

基分。

静粛性を増したアクラ級を始めとするソ連の原子力潜水艦に対抗
すべく開発された原子力攻撃潜水艦。非常に高性能だが、量産向き
ではないため本級よりは廉価なヴァージニア級原子力攻撃潜水艦も
平行して建造されている。

解説

本来は一、二番艦と準同型艦のジミー・カーターしか建造されな
かった。アメリカの潜水艦は良く分からないのであんまり突っ込ま
ないで><

なんか解説を入れていたら詰め込みすぎたなあと実感。

この前『たけしのテレビタ。クル』を見てたら評論家先生が中国
のヘリの異常接近やらをあげて「日本は舐められているんだ！ 普
通の国ならこんな奴は撃墜する！」なんて吼えておりましたが、私
は寡聞にして、ソ連の空母キエフに米軍のB-52が撃墜されたと
かって話は聞きませんな。

ネットでロシアのニュースソースなんかを巡ってみるとなかなか

面白いですよ。日本ではロシアや中国の軍用機、艦艇が何かをやらかすたびに「こんなことスラブや中国の蛮族しかないぞ！ ぶつ殺せ！」などとキチガイども咆えますが、ロシアもアメリカやイギリスに同じようなことをされてるんですからね。「空母キエフの真上を低空飛行でフライパスするB-52」とか「公海上でロシアの巡洋艦ピョートル・ヴェリーキイに対艦攻撃訓練を行って墜落したスウェーデン軍のビゲン」とか、そんな話ばかりです。別にロシア人にしてもそれにキレた様子はありませんし、要するに「ちよつとした挑発行為にキレるのは周りが見えてない奴のすること」ってわけです。

わざわざ「軍事機密の塊」が近くにやってきてるんだから、苦笑いを浮かべながらでも「中身を探ってやろう」ってぐらいの度胸は必要ですぞ。まあ、自衛隊の現場で働いている方々には負担が大きいかも知れませんが、でも、自衛隊の方にしても言われなくたって接近してきた相手の分析ぐらいやってるでしょうし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4906i/>

赤い旗が風に靡き

2010年10月8日13時46分発行